

語りの中の職業コミュニティ

— 峯村杜氏のインビボ・コード —

伊 賀 光 屋

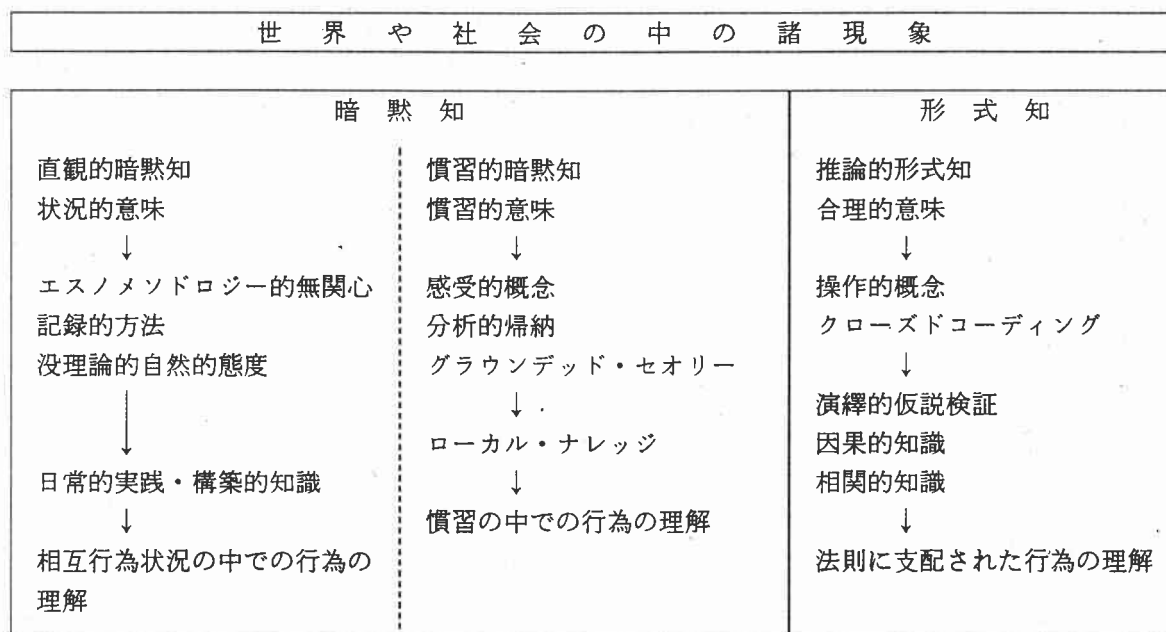
第一節 内側からの解釈の方法

人間が一見バラバラな諸出来事の集合に直面したとき、それらの出来事に秩序を与えるやり方には、大別すると次の二つのやり方がある。一つは、個々の出来事の全体像、あるいは諸出来事からなる全体の全体像をそのまま捉えるやり方である。今ひとつは、なんらかの外形的特徴の諸次元を発見し、推論的、分析的に出来事を特徴付け位置づける方法である。前者によって知られた出来事の秩序が暗黙知といわれ、後者によって知られた出来事の秩序が形式知と言われる。

暗黙知は直観的暗黙知と慣習的暗黙知に分かれる。直観的暗黙知は全体像を自らがたまたま置かれた状況の流れから把握する場合で、慣習的暗黙知は全体像を自らが成員である集合体の認知的慣習から把握する場合である。

人々が、直感的暗黙知に頼り出来事の状況の意味を捉えたものが状況的（文脈的）知識である。また、慣習的暗黙知に頼り出来事の慣習の意味を捉えたものがローカル・ナレッジである。そして、形式知にたより推論的で合理的な意味を捉えたものが、脱状況的・汎用的知識である（図1）。

図1 三つの解釈



これらの、人々が状況を介して共有する状況的知識、慣習を介して共有する慣習的知識、言語能力を介して共有する汎用的知識を、観察者はどのように解釈しうるのか。解釈すると言うことは、人々と同じシンボル体系を駆使して、同じ意味内容を伝達出来るということに他ならない。

社会学で用いられてきた解釈の方法には大別して次の三つがある。第一は状況的解釈の方法、第二は内側からの理解の方法、第三は外側からの理解の方法である。そして、外側からの理解は、通常、解釈とは呼ばれず、説明と言われる。

状況的解釈としては、記録的方法がある。これは、ある状況内の出来事や発話（指標）の流れから文脈を読み取り、その文脈に照らして個々の出来事や発話の意味を、当事者のやり方で解釈する方法である。これは、出来事や発話の意味は状況の中で構築されていくという見解に基づいている。これを相互行為状況の中での行為の理解と呼んでおこう。

内側からの理解とは、繰り返される同じような出来事や発話の意味を、それが現れた個々の文脈を参照するのではなく、それらの類似した出来事や発話を発生させる、人々の共通の世界観、集合表象、信念体系、知識システムから読み取る方法である。これは個人の内面的意味は理解不能であり、理解されるのは集合的に共有されたシンボルに表現された意味であり、こうした意味は人々の相互作用の中で集合的に形成され解釈されるという見解に基づいている。これを慣習（practice of community）の中にある行為の理解と呼んでおこう。

外側からの理解としては、実証主義の操作的定義の方法がある。これは、研究者たちがこれまで行ってきた諸研究に基づき、概念と命題からなる理論をまず構築する。次に、概念を現実の現象に当て嵌めるために、その概念に対応する実在の現象と結びつけて操作的に定義し、その定義に合致するカテゴリー体系（クロズド・コーディング、あるいはピジョン・ホール）を予め合理的に構成し、人々の行動や出来事を隈無く分類する。ついで、カテゴリー間の数量的関連によって、諸命題を検証するのである。これは、法則的な行為の理解と呼んでおこう。

余談になるが、理念型によるカジスティークは内側からの理解と外側からの理解を歴史主義の方法を援用して結合した方法と言える。

さて、上で論じた三つの方法論は、データと概念および理論形成の面から見ると図2のような関係になる。まず、状況的解釈（記録的解釈）では、人々が状況の中で相互行為しながらカテゴリー装置を作り出すが、研究者はそのカテゴリー装置をエスノメソドロジ的無関心によってそのままの形で取り入れ、個々の出来事が指標となって示す出来事の流れを記録的に構成し、逆にその流れが反映するままに個々の出来事の意味を理解するという記録的解釈の方法を採る。つまり、人々が状況の中で構成した意味をそのまま無批判的に吸収し、その意味からかれらの行為を解釈する。この場合、理論は人々の行為の説明に向かうことはなく、人々がこうした諸行為から現実を構築する方法を説明する。

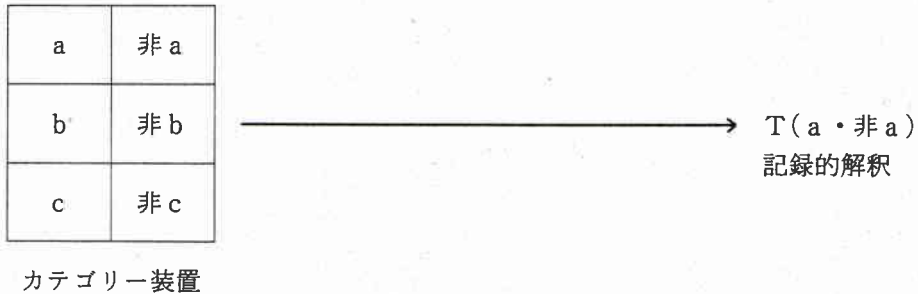
次に内側からの理解（慣習の中にある行為の理解）では、人々が繰り返し生き、実践した行為を集合的に表現した生きた言葉（インビボ・コード）からなる、人々の世界観、信念体系、知識体系をオープン・コーディングの方法によって、感受的概念に転換し、そうして構成した感受的概念間の陳述である諸命題を分析的機能の方法で琢磨していく方法である。これは、シンボリック・インターアクションニズムに基づく古典的なグラウンデッド・セオリーの方法に他ならない（ただし、木下はグラウンデッド・セオリーは特定の理論的パラダイムに依拠していないことを強調している、1999: 47-55）。ここでは、理論は人々の集合表象から人々の相互行為を説明するものとされる。この場合、内側にいる人ならば慣習的に前意識的に了解していて説明不要だが、外部の人ならば意識的に努力して理解しなければならないことを、人々の視点に立つことで理解させる方法といってもよい。

外側からの理解（実証主義的定義の方法）では、まず、研究者の概念装置が存在し、それに当て嵌まる人々の行為、出来事を収集し、それらの概念で表された諸特性を数量的値に変換し、数量的分析の諸方法を用いて概念間の因果的、相関関係性を明らかにし、行為や出来事に主観的に思念された意味とは別の、客観的に存在するが、人々が意識しているとは限らない因果的、関係の意味（法則、原因、機能、構造など）を明らかにする。この法則的理解では、実際に生きた人々の体験はバラバラに切断され、内側からの統一は失われ、外側から秩序を与えられるといってもよい。

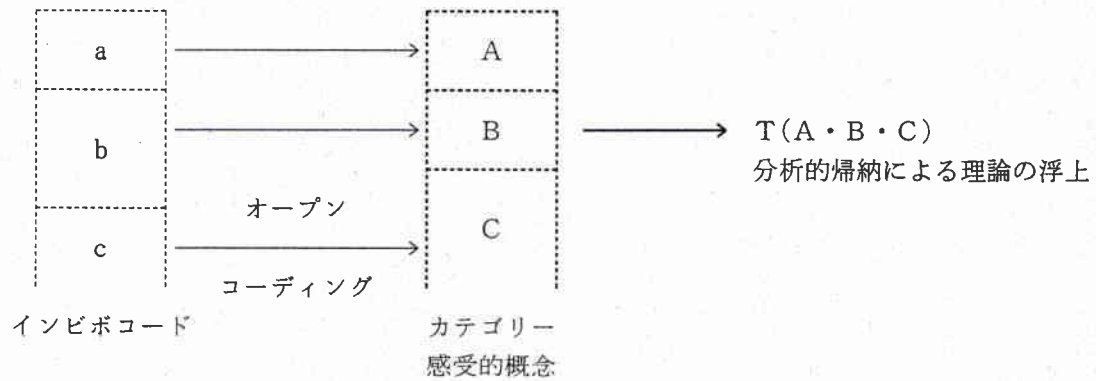
本稿では、内側からの理解、すなわち慣習の中にある行為の理解の方法を採用して、ある名杜氏の語りの中から、かれがシンボリックに構成している職業コミュニティを摘出する作業を行う。

図2 データ分析と理論形成

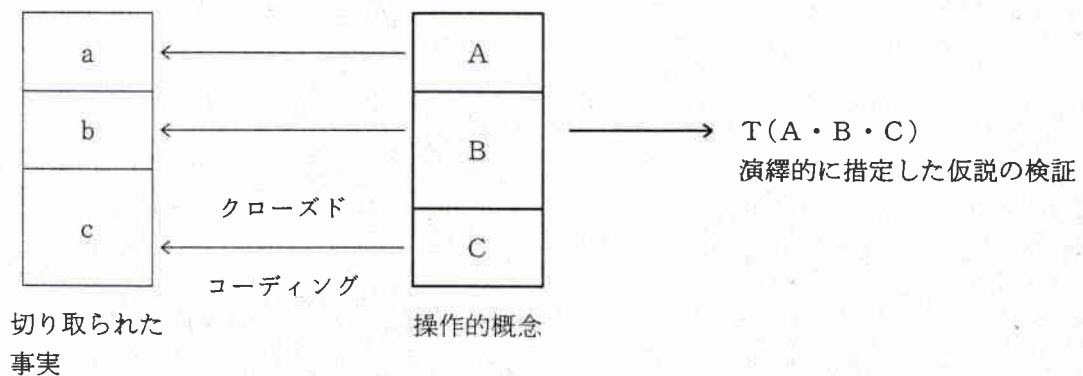
(1) エスノメソドロジー



(2) グラウンデッド・セオリー



(3) 実証主義



人々の捉えた事実

研究者の概念装置

命題の体系

データ分析・概念化

理論

第二節 グラウンデッド・セオリーの方法と絵画的な方法

(1) 古典的な、グラウンデッド・セオリーの方法

そこでまず、分析的帰納法を重視するグラウンデッド・セオリーの古典的な理論浮上の方法をB.G. Glaser, & A.L. Strauss (1967) によって、また、GlaserとStraussが袂を分かってから、演繹・検証法を重視する理論検証的方法をA.L. Strauss, & J. Corbin (1990) に従って、見てみよう。そして、後者の演繹・検証的方法が外側からの理解へと転じやすい危険があるので、分析的帰納の考え方を保ちながらデータ解釈の手順を一部修正してみたい。特に、マイクロ分析をテキスト分析に変えること、オープンコーディングと軸足コーディングの段階まではインビボコードやフォーク・タームを生かしてコード化を進めること、選択的コーディングの段階で初めてテクニカル・タームによるコーディングを試みることなどの修正を行った。全体としてはナラティブ分析を行っていることになる (Denzin, N.K., 1988)。

古典的なグラウンデッド・セオリーは、T. パーソンズらの誇大理論 (Grand Theory) や J.H. ターナーの分析的理論化にみられる演繹的方法論と対照的な帰納的方法論を体系化していた。それは事実に基づく理論で、次の二つのサブタイプがある。

- ① **実質的理論 (substantive theory)**；患者のケアとか、人種関係、職業教育、非行、研究組織といった社会学的問題に関する、特定領域あるいは経験的な領域のために展開されてきた理論。
- ② **形式的理論 (formal theory)**；スティグマとか、逸脱行動、フォーマルな組織、社会化、地位の一致、権威と勢力、報酬システム、社会移動などのような社会学的問題に関する、抽象的な構成をめざした、あるいは概念的な領域のために展開されてきた理論。

データに根ざした形式的理論は演繹によって得られた誇大理論よりも、予測や説明を行うという実践的場面で有用であり、信頼できることが多い。そこで、実質的理論から形式的理論へと展開するための方法として、「書き直し」と比較分析が用いられる。書き直しは領域に密着した固有名詞を排除して普通名詞に置き換えていく過程のことである。比較分析については、グレイザーらは、「絶えざる比較法」を提起する。これは次の四つの段階を踏む。

- ① 各々のカテゴリーに適用可能な出来事を比較する段階。
データの中の出来事をカテゴリーにコード化し、同じカテゴリーのコード化されている出来事どうしを比較する。
- ② 複数のカテゴリーとそれらの諸特性を統合する段階。
出来事どうしの比較から、カテゴリーの特性と出来事とを比較する段階へと移行する。そのなかで、カテゴリーの一特性に関する知識が集積され、関連づけられ、統合されていく。
- ③ 理論の及ぶ範囲を限定づける段階。
一つのカテゴリーに当てはまる出来事をそのカテゴリー特性と比較していくと次第に大きな修正を必要としなくなり、理論は固まっていく。理論が固まっていけば、関連のない特性を排除して、リダクションを行い、カテゴリー群や特性群の根底にある同形性が発見でき、理論の及ぶ範囲が限定される。
- ④ 理論を書く段階。

(2) 内側からの理解を表現する絵画的な方法 (il metodo pittorresco)

K. Charmaz (1995, 2000) によれば、B.G. Glaser (1992, 1998, 2000) も A.L. Strauss, & J. Corbin (1990, 1998) も認識対象は客観的に実在し、それを認識しうる唯一の方法は経験を通してだとする実証主義的観点に立っていて、両者の違いは、前者が帰納法や理論の浮上を、後者が仮説・演繹法や理論の検証を重視している点に過ぎないとしている。そして、自らは、認識対象は観念の中に存在し、その把握は意識を通してしかありえず、対象者と調査者の語りと聞き取りという相互行為の中でのみ、そうした意識の把握は可能であ

るとして、構成主義的なグラウンデッド・セオリーの立場を主張している。このようにCharmazの場合には、第一節で述べた状況的解釈に近づいていくものと考えられる。ここでは、内側からの理解を求めて、B.G.Glaser,& A.L.Strauss (1967) の分析的帰納の方法を生かすべく、A.L.Strauss,& J.Corbin (1990) のオープン・コーディングを、Geertz (1983) のローカル・ナレッジを捉える解釈学の方法や柳田民俗学の寄寓者の学の方法（柳田国男, 1980）に基づいて、インビボ・コードやフォーク・タームに焦点を合わせて行う慣習的コーディングに改編し、マイクロ分析を行わずに、一纏まりのストーリーやエピソードごとの分析を行うナラティブ分析の方法を採用したい。

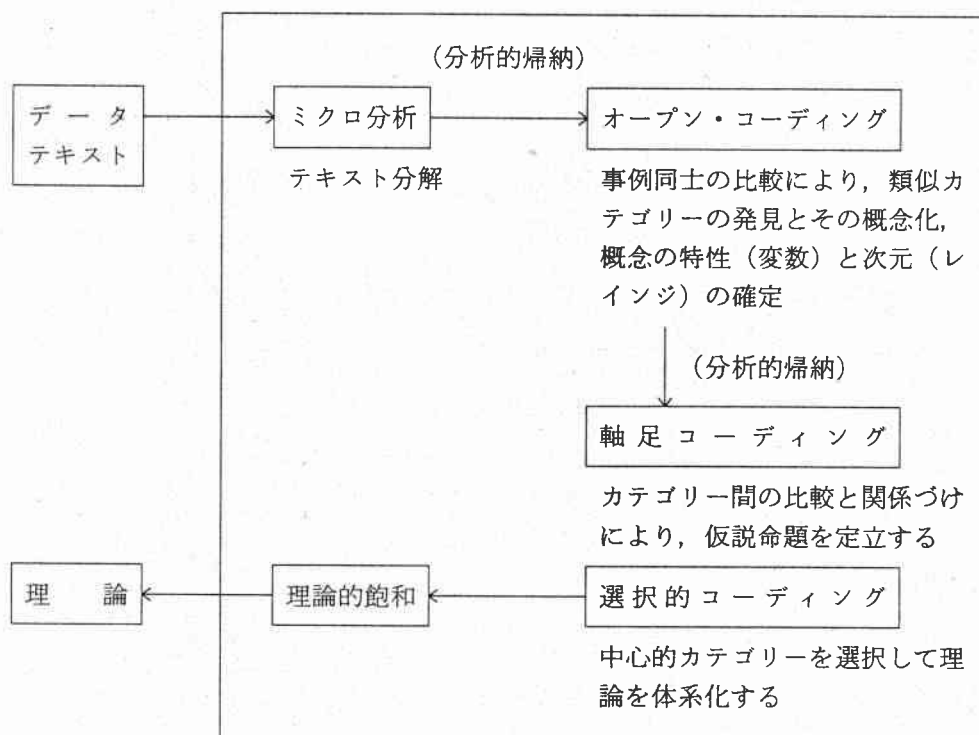
さて、A.L.Strauss,& J.Corbin (1990) による理論検証型グラウンデッド・セオリーの手順は、マイクロ分析、オープンコーディング、軸足コーディング、選択的コーディングの各技法から成っている（図3）。

まず、マイクロ分析、オープンコーディングでインビボ・コードを感受的概念へと翻訳する。ついで、軸足コーディングで概念間の関係を見極める。とくにある現象（カテゴリー）を発生させる構造・条件（なぜ、どこで、いつといった問の答えからなるサブカテゴリー）と生じている行為／相互行為のプロセス（誰が、どのようにといった問の答えからなるサブカテゴリー）とに関係づける。さらに、選択的コーディングで、中心のカテゴリーを発見して、それを他の諸カテゴリーと関係づける理論体系を構築すると言われる。

マイクロ分析とは最初のカテゴリー（特性と次元を伴う）を生成するため、およびカテゴリー間の関係を示すために、分析開始時に必要となる、詳細な一行ごとの分析のことであると言われる。マイクロ分析ではオープン・コーディングと軸足コーディングが併用され、その際に、メモが付けられる。メモは分析、考え、解釈、問、そして今後のデータ収集のための方向性を記した研究者の記録である。

さてこのマイクロ分析において、インビボ・コードを直ちにテクニカル・タームでラベルづけることは、分析的帰納の方法から逸脱することになると考えられる。A.L.Strauss,& J.Corbin (1990) の方法に依拠して行われたデータ分析の多くが、インビボコードを直ちにテクニカル・タームに置き換えている。テキストを切片化して直ちに概念化すると話者のひとまとまりの言説がズタズタに切断され、研究者の概念装置に翻訳され、話者の世界の分節化の仕方、すなわち話者の社会的世界の話者自身による意味づけや解釈のやり方が消え去ってしまう。話者のテキストの持つ結束性（coherence；R-A.de Beaugrande & W.U.Dressler,

図3 グラウンデッド・セオリーの手順



1981)を維持しつつ、トピックスについての話者の言説を保存する分析をするためには、ミクロ分析はむしろ有害であり、テキスト分析を実行すべきであると思われる。だから分析の単位はセンテンスではなく、少なくとも段落、場合によってはエピソード全体であるべきだというのが私の考え方である。

オープンコーディングとはデータの中から概念を識別し、それらの特性と次元を発見する分析上のプロセスであると言われる。これによって、データはよりはっきりした諸部分へと分解され、綿密に検討され、類似と相違という視点から比較される。出来事、事象、事実および行為／相互行為の中で概念的に類似しているもの、あるいは意味上関係があると思われるものは「カテゴリー」と名付けられた、より抽象的な概念へと一括りにされていく。オープンコーディングはクローズドコーディングと異なり、すべての現象を何らかの範疇に分類するために予め分類体系(コード)を用意するのではなく、諸現象の分類を進める中で新たな範疇が必要になればその都度そうした範疇を加えたり、分類のやり方を変えたりして、現実に沿って可変的で柔軟な分類体系を作っていく方法である。だから、そうした範疇は当然のこととして、新たな現象に合わせてその内包と外延が変化していく感受的概念である。感受的概念というのは、フィルム上の像が被写体からの光によって色を変化させる現象をもじった命名であることは明らかだから、本来感光的概念と訳すべきかも知れない。

構造化された質問紙で収集された職業コミュニティのデータがクローズドコーディングの方法で分類されれば、概念は厳密で、操作的に定義された概念となる。そして仮説演繹的な命題群を定立し、先のデータで検証するなら既成の理論が検証される。しかし、職業コミュニティに関するデータ(語り)を収集しオープンコーディングの方法で概念生成やカテゴリー化が図られれば、それらの概念は柔軟な感受的概念となる。そしてそれらの感受的概念から分析的帰納の方法で命題群が彫琢されれば、自ずと理論が浮上してくるというのだ。

なお、ここで、概念とは命名された現象のことで、インビボ・コードとは話者の生きた言葉を用いて命名されたコードのことであり、カテゴリーとは諸現象を分類する概念のことである。そして、カテゴリーは研究者が被調査者にとって重要だと思った問題、事柄、事象、あるいは事件を表す概念である。カテゴリー名はフォークターム(その社会集団内の人々が標準的に用いる語)で示す場合もあれば、研究者が先行する諸研究から理論的に構成した概念の名称であるテクニカルタームで示す場合もある。

木下(2003)は「オープンコーディングのオープンの意味はデータから可能な限りのあらゆる解釈を『論理的に』検討しコード化することだ」(p.156)と言っている。これをもっと敷衍すれば、オープンコーディングは、クローズドコーディング(ベールズの相互行為分析図式のようにすべての現象を予め構成された分類体系のいずれかのカテゴリーに必ず分類する方法)と対比して言われる。そして、諸現象(データ)のプロパティに基づいて、サブカテゴリーが作られ、それらのサブカテゴリーを類似性に基づいて上位のカテゴリーへと括っていく。そして、新たに現れた現象(データ)が、これまでのサブカテゴリーのいずれにも含まれない場合、新たなサブカテゴリーを作り、上位のいずれかのカテゴリーに含める。それが不可能な場合には、新しい上位のカテゴリーを構成する。このように、サブカテゴリーや上位のカテゴリーは新たな現象(データ)の出現によって追加されたり改編されたりしていく。だから、オープンコーディングの方法は感受的概念や分析的帰納の考え方とセットになっていて、新しいデータや新しい事例の研究によって、終わりにくく改編されていくということだ。つまり、オープンエンド・クエスチョンと同じように、コーディングやカテゴリー化は閉じておらず、追加や改編がいつでも可能になっているということだ。そして、理論的飽和が生じたところで、研究は一段落して、暫定理論が措定される。しかし、新しいデータ分析は、この状態をいつ突き崩すか分からない。いつまでもカテゴリー、概念、命題の体系は潜在的にはオープンである。このように、オープンコーディングの作業を重視している限り、古典的なグラウンデッド・セオリーは生きていけると言えよう。

軸足コーディングとはカテゴリーをそのサブカテゴリーに関係づけていくプロセスであると言われる。このコーディングは一つのカテゴリーを軸としてその回りに他の諸カテゴリーを特性と次元のレベルで結びつける。軸足コーディングの目的は、オープンコーディング段階でバラバラにされたデータを再度集め、組み立てていくプロセスに着手することだ。軸足コーディングでは、現象に関するより正確で完全な説明を作り上げていくために、カテゴリーをサブカテゴリーに関連づけていく。

ここで、サブカテゴリーとは現象そのものを表す概念ではなく、いつ、どこで、なぜ、誰が、どのように行為し、その結果なにが生じたかといった問に答えを与える現象を表す概念である。サブカテゴリーと関係づけられることで、カテゴリーは明確さを高めていく。

言い換えると、軸足コーディングとはパラダイムを用いてある現象が生じる構造・条件やプロセス（サブカテゴリー）を明らかにする作業である。ここではインビボ・コード（フォーク・ターム）を用いて為された陳述を概念（テクニカル・ターム）を用いて理論化していく作業であると言われる。

この軸足コーディングについて私見を述べるならば、サブカテゴリーと言われるものはすべて、インビボコードあるいはフォーク・タームで構成し、それらを上位カテゴリーに纏め上げた場合に付ける名称はテクニカル・タームにすることが望ましいと思う。こうすることで、先行研究や、研究者個人のそれまでの理論的・実践的経験のなかで形作られている定義的概念や既存理論のデータとの不一致が明らかとなって、それらと異なる感受的概念や新しい理論の浮上が可能になるからだ。

次に、**選択的コーディング**とは、理論を統合し、精緻化するプロセスであると言われる。まず、最初のステップは中心的カテゴリーを決定することである。次のステップは、その中心的カテゴリーと他の諸カテゴリーを関係づけていく。そしてこの体系化はカテゴリーが飽和状態（これ以上新しい特性、次元、あるいは関係が生じてこなくなる分析上の一時点）に至るまで続けられる。

中心的カテゴリーの選択基準は次のようなものだとされている。

- ① 他のすべての主要なカテゴリーと関係づけられるもの
- ② データの中で出現頻度が高いもの
- ③ 抽象度の高いもの
- ④ 他のカテゴリーとの関係に論理的で一貫性をもつ説明が与えられるもの
- ⑤ 他のカテゴリーとの関係付けがなされ統合が進むにつれ、理論の説明力が増すもの
- ⑥ 完成された理論で諸概念の特性の可変性の範囲が説明されるもの。

本稿では先ほど述べた理由から、木下（2003）と同様に、ミクロ分析は行わない。しかし、その理由や方法的立場は異なっている。データを切片化しオープンコーディングを行うことで、プロパティに基づくラベル付けが観察者によって恣意的に行われ、コーディングの結果は観察者によって変わることになる。これは、Grounded Theory Mapping (A.E.Clark, 2003) や修正版M-GTA (木下, 2003) に依っても同じことである。また、私は、状況的解釈を行うつもりはない。内側からの理解を目指している。だから、観察者には聞き慣れない言葉（ジャーゴンやフォークターム）や、よく耳にする言葉だが一般の日常的用法やテクニカルな用法とは異なり話者達特有の用法をもつ言葉に着目する。ここでは、これらの言葉をインビボ・コードと呼びたい。これらの言葉こそ、人々の日常生活世界の分節化の仕方、認識の仕方、情緒の充填の仕方、信念のあり方を表現している。そこで、これらの言葉に着目して、その言葉を含むテキストの塊を、そのトピックスによって分類することにする。つまり、インビボ・コード生かしたままフォーカスド・コーディング (Glaser, 1978 ; Charmaz, 2006) によってカテゴリー化を進めると言うことだ。これは、私が産地研究 (伊賀, 2000) から一貫して用いている、**絵画的な方法 (il metodo pittorresco)** に他ならない。この方法は、概念化を進める際に、人々の認識方法、すなわち世界の構成やその色づけを生かして、そうした人々の概念を研究者が理論的用語に翻訳することで、内側からの理解の構図を最後まで保持し続けるものだ。すなわち軸足コーディングの段階で初めて研究者が概念を構成し、こうして構成された諸概念を上位のカテゴリーに纏める時に先行研究で蓄積されている共通概念を参照してその異同を明らかにし、必要があれば共通概念を修正する。ここでは、選択的コーディングの段階で、本稿での研究テーマである「職業コミュニティ」という既存の上位カテゴリーと、浮上し構成された、自己イメージ、職業文化、蔵生活と農村生活の収斂、リクルートなどのサブカテゴリーとを関連づける。木下 (1999) が言うように、Glaser流の理論浮上法では、人々の世界の分節化の方法、世界の構造化の方法、すなわち認識方法から自由に概念を形成するために、人々のテキストのもつ全体性や結束性を切断すること、すなわちデータの切片化（ミクロ分析）の作業が必要だとされる。これは、いわば木片や螺子で構成される工作の世界である。いいかえると、形式知による外側から

の理解である。内側からの理解の前提はあくまでも、人々の認識方法をそのまま生かすものでなければならない。我々は人々のフォークタームや職業語そして慣用句を絵の具として、彼らの描く構図に彩色していかなければならない。この作業のデータとなるのは話者が描いたストーリーやエピソード（スケッチやデッサン）である。私は、これらを合成して一枚の絵を構成する（モンタージュ法、伊賀、1986）。そしてこの作業をきっちりやった後で初めて、絵のコメントを数行に簡約して付記すればよい。これが浮上した理論である。A.L.Strauss, & J. Corbin (1990) や木下 (1999, 2003) は抽象画を描くが、私は写実されたパーツは残そうとしている。

さて、聞き取りに際して準備した質問項目は職業コミュニティの先行研究、とりわけ G. Salaman (1974) の職業コミュニティの要件、すなわち職業的役割に基づく自己イメージ、準拠集団としての職業集団、職業生活と職業外生活の収斂を探り出すための項目からなっている。その意味で、データは話者が自由に発想し、構成した語りによるものではない。明らかに、観察者の介入があり、その意味では、オープンではない。しかし、語りの中に表現されているように、話者には、関連すると思われるあらゆる脱線が奨励され、語りはまさに「自由に浮動した」といえる。このように、職業コミュニティが中心のカテゴリーになるように、インタビューは予め設計されていたが、語られる項目や内容、すなわちコード化される素材としてのデータの広がり、話者の自由な選択に基づいているといえる。

最後に、私の絵画的方法を纏めてみたい。それは、次のように言えるだろう。

- ① 構成（表現）が入れ子状になっている。つまり、私が聞き取った一峯村杜氏の構成した「職業コミュニティ」の語り一を私が再構成している。
- ② 語りの脱線は許されているとしても、私が聞き取り項目を設定していると言う点で、峯村杜氏の構成（表現）は、そのトピックスが限定され、方向付けられている。
- ③ 元々の録音のトランスクリプト（transcript）を提示しているのではなく、私が再構成している。その再構成のやり方は、まず、インビボコードを標識として、結束しているテキストをコード化する（その逸話のテーマは何かを名称づけて分類する）。次に同種のコードとして括られるテキスト群から成るストーリーに上位のカテゴリー名を付けて纏める。そして、最後にそれらを一貫した流れのある「語り」として再構成する。これは絵画におけるコラージュ（collage）の方法と対比されよう。また、元々の語りは、第三者の個人的秘密に関わるために公開することになじまないテキストを除いて、すべて利用されているので、グラウンデッド・セオリーが強調するデータの完全利用の要件は満たされている。
- ④ 以上のように、一見話者の構成した社会的現実を写実したかのように装いながら、実際には、その話者によって構成された社会的現実を私が密かに改竄して構成している。しかし、再構成においてインビボコードをはばそのままの形で残していることと、私の筋書き（第五節で述べる職業的コミュニティを生む諸要因の循環的連鎖）を話者が語りの中で同意されていることから、この「話」（tale）が全くの私の告白話（confession tale）や印象談（impressionist tale）（Van Maanen, J. 1988）ではないことは了解されるだろう。

第三節 峯村栄一氏のライフ・ヒストリー

今回、聞き取りに応じて頂いた、峯村栄一氏は全国で最も技能水準が高いと言われる関東信越局で昭和56年に春秋二回首席第一位に輝いた名杜氏であり、杜氏として50年間働いた中で、二つの蔵（静岡県の山中酒造と新潟県の千代の光酒造）しか勤めたことがない、人格が優れ、蔵の主人に信頼されきっていた杜氏である。そして、平成18年に杜氏を退職された。

調査は、平成17年11月15日（妙高市窪松原の千代の光酒造にて）と平成18年9月26日（上越市頸城区中柳のご自宅にて）に行われた。調査は非構造的聞き取り法（項目調査）で行い、おもな聞き取り項目は、ライフヒストリーに関する項目、酒造技法に関する項目、そして酒男たちの蔵での生活、自己イメージ、価値意識、母村での交流などに関する項目である。

まず、峯村杜氏の生きた言葉を手掛かりに、氏のライフヒストリーを再構成してみよう。

昭和3年1月7日新潟県中頸城郡頸城村中柳町で長男として生まれる。父は農業（二町八九反で部落で一二に多かった）の傍ら酒屋に出稼ぎに出ていた。群馬の酒屋にもと屋で出ていた。親族では頸城の下増田に唐沢勝（まごじいさんの実家で又従兄弟）が長野の湯田中の方に頭で行っていた。

昭和17年3月大瀧（おおぶけ）尋常高等小学校特修科（高等科の中の一年コースで野菜栽培や養豚を学ぶ課程）を卒業する。

昭和17酒造年度 静岡県浜松市向宿町 山下酒造場の下働き（ご飯炊き）として勤務。蔵人14～18人で日仕舞で仕込む蔵であった。造石数は不明。杜氏は三和村下越の福原さん。紹介者は近所の峯村さん（高崎の酒屋に麴屋に出ていたが、福原さんのところに、栄一さんと行くことになっていたが、都合が悪くなり山下酒造場には栄一さんだけ行った）である。

山下酒造に入られた時はまだ14、5歳でいらしたと思うんですけども、

「そうですね15歳、数えて16でしょうかね、高等2年終わらして3年というのを1年入りまして、ほんであんでは、あの予科練に志願してみろなんて上の方から盛んに言われましてね、それで酒屋に逃げて、ほんで最初の時は直江津の方で、その次の次の年ですか甲種飛行予科練受けたんです。ですから十、二十、二十歳ですから2年後ですね。それで酒屋行けや兵隊に行かんでも良いと思ったらそうでもない。ははは、それで静岡の商業学校へ甲種飛行兵、直江津で受けたときは目が飛行兵1.0以上ねいと駄目ですね。その時分夏でしたから田の草取りしましてね、目で葦突きましてね、それで目が片一方1.0無かったんです。それで落ちましてね、で今度静岡へ酒屋行って静岡の商業学校で受けましてね、そしてあんでは、そんな時合格しましてね、ほんで後で聞いたら、一緒に受験した連中は、優秀な、1月か2月に受験しまして優秀のは4月ごろ皆入隊ですね、でわしは9月の入隊ってきたけれども、8月15日終戦になりましてね、ほいで後で聞いたらね4月に入った連中は3ヶ月4ヶ月操縦桿みんな覚えて、そしてあの船にぶつかれて特攻隊みたいなんでしょ、そいで帰りの燃料が無いんだって、あと聞きましてね、たまげちゃって。そいでお前遅くて良かったのう、早く行ったのは皆戦死したなんてね、あとで仲間で話しましてね、運がいいや。そしてその時分親父あんでしょ、わしににあにお前一人だから、お袋も泣いて志願しないでくれって。ところがわし国のためにやらんきゃなあて、あの時期頭こうなったんですね。」

昭和18酒造年度 静岡県浜北市貴布祢 太田酒造場に働きとして勤務。頸城村で第一回の黄綬褒章を頂いた鶴ノ木の石田忠義（第一回目の全国杜氏会長）が杜氏をしていた蔵で石田氏が連れて行ってくれた。

昭和19酒造年度 静岡県浜北市貴布祢 日本勢（にほんいきおい）酒造場に働きとして勤務。杜氏は石田忠義氏。何工場かが合併して日本勢いになった。蔵人は二十数人いた。

昭和20～23酒造年度 石田氏から静岡県大須賀町 山中酒造合資会社に行けと言われた。釜屋として勤務。造石数は1500俵くらい。蔵人は11人。頸城出身者で固める。

いつ頃から杜氏さんというのを具体的にイメージして、やりたいなあなんて思われましたか？

「そうですね、四・五年たって釜屋ってのを、この石田、鶴ノ木から行っていらした石田忠義さんて方は、全国第一回目の全国杜氏会長をやられてましてね、そいで黄綬褒章もあの方は一番目だったんです。第一回目。もうとつくにあれですけどね、うちの親父と同じあれですから、とつくに亡くなられてまして、それから大滝嘉久蔵さんはこの八月に亡くなられて、」

亡くなられましたあ？

「はい、それで葬式に行ってきたましてねい、今度十五日に四十九日の法要、それに行こうと思ってんですは。ですから偉い方に仕込まれたわけですね。それで四・五年経って、その石田って方はねい、君今度釜屋にしるから、釜屋やれと言うのでね、ほんであのう、あれ山中酒造行って、日本勢行ったんだけど、そこから杜氏さんが出て、石田さんの親戚の方が杜氏になったのでその釜屋にお前行けと、それであの時分二十円、うん三十円位だったで

すかねい、お前に余計にくれるからて言われましてねい、その時からですねい。これどうしてもあれだなあ、今度酒屋しるってとになるなら、やっぱりお役にならんかなあ、あの時分みなしかられていましたからねい、足はあかぎれでで切れましてねい、ほんでそら荒っぽい若い衆なんて、ほら木の鎚でばんで叩きますからねい、こりゃ偉くならんかだめだなあて、いつまでもこんなことして下っ端にいりゃあ技術も覚えねいし叱られてばっかいるなて思いして、その時分から、こりゃあまあ勉強して、まあ杜氏にならなくても三役ぐらいはならんかならんあと思いましたねい。その時分からです。」

なるほど、

「それから勉強したってたいしたことないですけどね、少しずつ勉強するようになりましたねい。はい。」

それは大体年齢で言うと20前後位のころでしょうかね。

「そうですね、えーと私は3年生まれで、昭和より2年下ですからねい。だから19位かな。釜屋ん時は。はい、19歳かなんかでしたねい。」

そうしますとその後に24年から麴屋兼頭になって、

「それから今度試験場になって」

それで、技術的に一人で全部自分でこなせるなて自信がついたのはその頃でしょうか？

「いやー、まだまだあれですねい。まだまだ不安でしたねい。ですから杜氏さんに聞いたり、それからその前の頭さんてのが、向かいで醤油を造っていたんですわ。あの山中酒造でねい。そんで、その杜氏さんの弟が頭やっていたのが、醤油の杜氏になって、そいで私を頭にしてくなされたんですねい。そんで、その方に聞いたりねい、でその方こぶなつぐ人でねい。醤油を十年間ぐらい年間通してね。で酒屋の方辞めて向かいの醤油造りやりましてねい、そんでまた醤油ってのは桶も酒屋の古い桶使いますし、別の桶も有りましたですけどねい、それで袋も酒屋の古い袋で絞られるんです。そして釜も酒屋の古い釜もってって、酒屋の方新しい釜買って、あれ便利ですねい。」

逆は出来ないですね。

「はい、そんで麴もあんでしょ、フスマ麴でもう、酒屋の麴と違って、酒屋の麴乾燥して乾いた麴造るんですけどねい。醤油の方は湿気てびしゃびしゃする物なんですわ、で中あんまり入ってますと汗たらたらかく、それで袋、麴蓋、槽もみんなそっちもっていくんです。はい、であの粕絞る袋なんて古くなるとみんなそっちやりましてね、で醤油も槽で木の槽で酒屋と同じように絞るんですね。そんで、醤油も一番最初のやつものすごく美味しいんですよ。それも買ってきたりねい、それから二番、三番と絞るんですねい、あれ。また塩水入れてねい。だからこれ醤油の方が儲かるなて思ったんです。酒の方はそう言う訳にはいきませんがね。そう言うこともございました。そしてあんですは。釜屋4年やらしてもらったのかなあ。そしてあんですは麴2年やって、頭麴4年やらしてもらったんですねい。そしてあんですは、最初なんかねい麴なんか見ても実際自分なんか初めてでしょう、あの固い麴出ましてねい、あの時分米なんかあんでしょ掛米はむしろ食べる米よりちょっと白い1割ぐらいですね、1割削るだけ、いま90％で言ってますね。そんであの麴米でも1割5分から1割7分位、ほんで米無い時代ですからねい、黒いですから、ほんで難儀でねい、麴固くなりましてねい、杜氏にぶつけられてねい麴を、室はいるとパーと『こんな麴あるか！』てねい、あれまあスパルタ式だったんですねい。片一方にすれば教えるつもりですからねい。『いや申し訳ありません』てねい、約1月くらい、あの寝床入るけど寝ねいぐらいにねい勉強しましたねい。そうしたらねい一月ぐらいもう必死になって、まあ他の連中もおい峯村さんこうやった方が良くいんだらうて、みんな釜屋なんか仕事一人でふた仕事ですから、今みたいに機械やこんなでないすからねい。そいでねい、手伝いに来てく

れてねい、それからこりゃあもう勉強しなければならんと思ひましてねい、こりゃあもう杜氏に麴ぶつけられてもそりゃ愛の鞭だから、こりゃ杜氏にならんから、杜氏になって恩返し、それ以上に酒造らんかなて思ひましたね。そのところが一番勉強したんじゃないですかね。」

その頃教本みたいなのは有ったんでしょうか？

「講本もありました。あのこんな厚い本ね。でもねい、やっぱり本見ても、程度が悪いでしょう。昔から杜氏なんてほらあれでしょう、技術は体で会得すんだけど、大滝さんよう言いなすったけど、『杜氏なんてあんなのはなあ、みんな馬鹿ばっかだすけなあ、おまえらなんて体で会得しなきゃ駄目だ』てよくそう言いなすった。頭が程度が悪いから体で覚えるよりしょうがないですねい。ほんで、あんですは、講本見てんですけれど、基本は分かりますね。でもやっぱり実際ね、自分の体で会得しなきゃだめですね。温度とかこの、室入りますと乾湿の差とか、温度とか、米の柔らかいのとか固いのとか色々その米その米で違うんですね。同じもの入ってこないですから、今もう機械ですからね、今なんかわし最近なんかね、ストップウォッチで洗米なんか何秒でやんでしょう、だからもう大概のものが出るんですけどね、まあ昔はもうねいそんなありませんから、それで温度計だって見ますけど流行ったばかりで、その前は手でこうやって、自分の体温36度でこうやって飯やってええ34度か5度なりゃ『おい仕込め』なんてそう言ったぐらいですからね。ですから講本ありましたけれどねい、まあ見てもこの眠たくなっちゃいますしねい、夜起きてますから、ですからやっぱり講本も見ますけれど、講本より現物の会得ですねい。はい、」

昭和24～27酒造年度 山中酒造合資会社に麴屋兼頭として勤務。

昭和28～29酒造年度 新潟県醸造試験所に伝習生として入る。同期に中川酒造元杜氏佐藤源司氏がいた。そのころ嶋先生が広島から着任し、以来付き合いがある。

ちょっと戻さして頂いて、あの醸造試験場に伝習生で入られたときに、技術的に何か得るものって有ったんでしょうか？

「はい、それはもう、焼酎、芋焼酎までね、わしら酒の本段ボールに幾つもあるんですよ。それ勉強になりました。はい技術的なことはね、そりゃわしら今まで酒屋頭までやって行っただけですけどね、ほら何だ分子記号から全然知らんでしょう、それで試験場入ったら基本的なこと、全部ほらね、それは勉強になりました。はい、ただこんだ試験場出たらそれをいかに応用するかね、それだけですけどね。それはもう行ってまたたまげましたけもんね。自分で我流で、杜氏さんにさんざん叱られたりして、麴ぶつけられて一生懸命だったけれども、やっぱり分子式からそういう基本のことを、こうそうりっか（酵素力価）からそういうの知らなかったですからね。わたしらですからね、酒屋なんてただ仕事してものの良いの造ればいいやってきたんですからね。」

後で現場に出てまた造るようになって、醸造試験場で習ったことで一番役に立ったのはどういうことでしたか？

「そうですねい、まあ、基本的なことはすべて役に立ちましたねい。それと、そうですね科学的で言ったら別になんですけど、分析なんかも試験場ですと今まで酒屋で教えられて覚えたのとやっぱりね、試験場の方は基本にばっちと、寸分違ひませんすけ、酒屋の場合ほらね我流で、教えるたって多少違いますわね。だからそういう点では酒の基本は試験場ですねやっぱり。そりゃあもう大変勉強になりました。はい、まあすべてにねい、麴造りも、それから分析も、それから仕込み配合とか、米の膨張具合とかそういうの、普通の酒屋ではそういうのほらな、あの時分全然やりません。今もう、うちの酒屋あたりでもストップウォッチで色々なことやってますけどね。その時分酒屋なんてのはね、ただ見よう見まねでねやりましたから、そりゃもう試験場行ってたまげました。ほうらやっぱり科学的で、試験場だなんて思ひました。そんでね、わし22期生だったけれど6人ですかね。でね、30人ぐらいで試験やりましてね、それで試験場行ったら、知ったのも二人ばかり居たったかな。やハッキリ飲んできたとか、一週間前からネギ食ってきたとか、試験に落ちねいように。試験なんて受けること無いでしょう。そしたらあっこ行ったらその人落ちちゃったんですけど。『ばか、俺一週間も二週間も前からネギ刻んで食ってんだ』そういうの

もいたし、みんなで笑ったんだけど、ははは、なかにねニソニックとニラとハッキリ食うて来たていうのもいた。『高い銭出してハッキリ買ってきて、あんでもよく分からなかったな』で中には居ますしね、そうしてみんなで笑って、まああんたぐらいどっちみち落ちんだすけ、落ちりゃ誰かまた行かれないだから、そういつてたんですわ。そうしたらね、わしお陰さんで合格だ。そして後で試験場に行つてね、みんな頭良いのばかり見えたら第二位だって書いてあるの。はははは、それまたこういうの早いのは紙かなんかでこう、副杜氏かなんかあれかな、学科なんか大したこと無い算数となんだ、なんかと四つばかり、であと口頭試問とね、で口頭試問で『君は何で試験場に志願した』なんてのがありましてね、ははは、『いや、酒造りを天職と思って、基本的に勉強したいので来ました』『あ、そうか』『趣味は何だ』『は、魚釣りであります』『読書はしねいのか』『はい、あんまり頭が悪くて』なんてそんな質問でね、ほんであんですは、幸いにね、合格してそこらにおった人、おいげんしょくしたかや、さぼっちゃったななんてそういつてたんです。後で聞いたらその人落ちちゃって。二位とか聞かんかった、ははは。そしたらおやおやハッキリ買って飲んだとかそんなのばかりでしょう。みんなその程度だったんですね。そうしてあとみんな笑つてねい」

それで、当時からですね伝習生になるとどこかの杜氏さんに推挙してもらえるという仕組みになってたんでしょうか？

「はい、ですからね、わし二年卒業しましたらね、その時分星野先生で方が場長でね、その方がね、石田さんにそう言つて、わし前に石田さんにもお世話になったでしょ、山中へは釜屋は石田さんの親戚の人が出るの、この夏の石田さんとこの釜屋行つてくれ、給料上げて心配しよう、そいで石田さんにその場長が頼んで、『大瀧町のふなこうの酒屋（藤縄酒造）行つてくれないか』、場長。そしたらわしそばでしょ、そんで雪降んでしょう、で石田さんに『本当に申し訳ないですけども、わし静岡で二十何年も勤めて、雪のねいどこであんだし、勘弁してくれて』そう言った。『場長がそう言つてんのになぜや』、『勘弁して頂きたい、でまあ、向こうにもうちと居たら静岡の方にさんざんお世話になったところに杜氏に、試験場出たら杜氏に来て大旦那さん言つてなるて噂も聞いてますし』、でようやくやと断つた。そこでそのふなこうの小せい酒屋、火事になりましたね。今造つてません。いま向こうのね霧ノ塔でところへ権利みんな売つたんですかね。十何年も前になる。」

昭和30酒造年度 静岡県浜北市貴布祢 日本勢酒造株式会社に分析並びにもと屋として勤務する。

昭和31～48酒造年度 静岡県大須賀町山中酒造合資会社に杜氏として勤務する。石田忠義氏が杜氏に推挙してくれた。

昭和49～51酒造年度 京都市伏見区黄桜酒造株式会社に副杜氏として勤務する。紹介者は杜氏の大滝嘉久蔵さん（現97歳）であった。大滝氏は頸城村の杜氏組合の会長をしていていつもあちこちの蔵に行かないかと声を掛けてくれていたが、ようやく黄桜の話に乗せて頂いたという。頸城村から山中酒造にいた5人の蔵人を連れて黄桜に杜氏補佐として入った。造石数は25万石あり全国で五番目の規模であった。従業員は醸造関係で約100人、全体で300人程度の蔵であった。

「大滝さんじゃないが、技術を盗めて、大滝さんよくねい、わしら黄桜に行つたときもあの人全然聞かせねいですね。百人もいんでしょ、醸造部で季節約50人48～9人いて、常勤も50人近くいるんです。醸造部だけで100位いんですわ。黄桜、わしお世話になったとき25万石で全国五番目、月桂冠が一番だったですけどね。その方はねい、亡くなった大滝さんはねい、大杜氏で、全然教えねいのね、聞けや教えるけどね、『いいか技術なんてのはなあ、人の技術を盗むもんだ。俺なんか教えたつて、お前ら頭悪いのに何覚えられる。』こうでしょ、まあ技術には厳格な方だったですね。おんで、わしら副杜氏、今度黄桜の話になつてたんですけど、吟醸は他の者に見せねいのね。わしかね、常勤の主任か、こっちから一人なんだ、畑崎から上野てのが行つた、もうとつくに亡くなりましたけれどね、その人はねい、親父さんが大滝さんと仲間なのかなあ、その倅わしより二つ少なかったですかねい、その大將には吟醸の麴はやらしたんですわ、ほんでわし、黄桜いったらねい、峯村と二人でやれやて言つて、あの人も極端なんですわ、そんで他の連中はねい、吟醸棟なんか見に行くとねい、大滝さんがいる時はいらんねいの。『おとつあん来た。』黄桜では杜氏さん『おとつあん』、頭を『あんさ』で言うの。一日に一回ぐらい足ちんばすけ、こうやっ

て蔵回んなさんだ。『大滝、来たぞ。』と言うと、みんな3階か4階あるでしょう、1階いきゃあ2階行く、2階行きゃあ下さがるで、逃げてぐるぐる回って歩くわけ。あれ怒るすけ、そんでねい、わしとか頭とか側近は逃げらんねい。逃げちゃ今度叱られるから、われわれは側でねい。あの人は極端な人であんでね、そんでねい、教えねいで、技術は盗めと、それで吟醸の所他の者行くと、わしら權たまこ取ってねい、ぐーと出しましてね、こう笑ってまた掛けてねい、それで『峯村いいか温度を9度にしておけ。』そして今みたいにこの、なんだデジタル温度計ないですからね、水銀のこの厚いでしょう、だからちょっと曲げて見たりすると高くなったり、低く見えちゃうんですね。そんで9度にしておけて言うのを、大滝さん来なって『なんで野郎9度1分もあんねやっか』て怒ってねい、9度にしておけて、見方によって1分位違うよね、ほーいで胴巻きなんかばーて、私下にいと頭に投げるの、この布をばーと、酒に当たらんて人に当たるのあの人は。その代わりあんですは、一緒にそういうの仕事してりゃあ、覚えますからね。こうやるときはこうだなんて言わんくても、やっぱり自分で行ったりゃあねい覚えますから、そう言うこともありました。ほんであんですは、吟醸あれ、吟醸の麴も、醗も子守さして頂きましてねい、わしだすけ麴の時なんかねい、一月位布団で休まなかったですわねい、その上野と二人でねい、あの休憩室がまた温度ついてんですわ。適温あの時分21度か22度くらい、そこで結構畳敷いてあって休まれるんです。それで、他の連中も二人か三人ずつ番ありますからね。そいでその連中も一緒に休憩してねい、そいでお茶飲んだりねい、そいで大滝さんこうやって来ますとねい、『みなしろ、大滝来たぞ』そうしてこうやって戸を開けて、『峯村いたか』『はい』『何度だ』『いま吟醸なんて麴三十何度』『あそうか』電話でやんだけど、一度だけ、3階上がってきたのちんばで、まそれ仕事ですからね、そいて『おい峯村さん、行ったぞ』そう言ってるね、ぐーとまた戻ってくる、ははは・・・、いや面白いって言うかどうか言うんですかね。あの人はそういう所ひようきんだったかも分からんですね。そういうのもありました、ですから若い衆『峯村さんふといってね』『ばかふといったらまた叱られちゃうわ、うちれて叱られちゃうわ』、そ言ってあんですわね『おまん、大滝さんにちいとばっか逆らってみれ』『ばか、逆らったら大事だわ』そしたら、みんなが叱られんように注意してるでしょう。かしらやわしは側にいんすけ、『たまに大滝さん怒らせ』ていうんです、ちゃどんなんだ、そいでねわしもちょっと根性よかったすけ『峯村吟醸覚えてか』『こっちの耳からこっちへ出て行っちゃった』そしたら『馬鹿野郎、うちれ』て大滝さん怒っちゃってねい。あの人パーっと怒んだけど、後は良いんですよ。そいで二三時間たつと『峯村、おれなうちれいってな、広敷のうちれいってんや』ころっと変わっちゃうんで、そしたら若い衆『よくあんだねい、我慢しなね』『我慢しなねたって、大滝さん習いに来たがね、師匠じゃないか』『いやあ、普通もん我慢してられんよ、お前良く我慢してる』『ばか我慢するって、勉強しに来たってそんなにお前、あの、人は人にもまれて人になるて、若いときからそう言われてんがねて』『ああそうかない、やあわしらみんなね感心してるんらわ、普通者そんなに叱られりゃ、昔ねい若いもん5〜6人家に帰ったのいんだよ』『ばか家帰れって、家なんかいられっか。家いりゃ酒屋いったもんなんて見損なわれちゃうわ』てな、そう言うこともありました。だから面白いやら、まあ面白いって言ったらあれだけでも、なんかこうあんですはねい、その大滝という大杜氏は端的なんですわね。端的過ぎるってかね、もうそのばーて怒るけどまたすぐ良くなっちゃうです。はい、そういう方なんです。そのかわりもうあんですね。もう酒になりゃ、がーと神さん乗り移ったみたいになっちゃうんですね。もう白衣着てね、目えもう上がっちゃいますしね、だからもううっかりして、まごまごしたらこうしてやられちゃうけどね。いや昔、神杉行ってね。行った人まだ生きてんだけど『峯村さん、やかましいおとつあんだね、よく二年も勤めたな』て、『ばか、もうちょっと居たいけども、嶋先生、あそこいくすけ辞めたんだわ』『おりゃ、二十なんぼもと屋やってんだが、機嫌悪い時、針もみんな投げて、そこらみんなぶつけていったもんだ』そう言ってね、へへへ。技術にはもう鬼なんですわね。それだあわれねい、良い人なんですけどね。ですからね、4月今年退職してから行こうと思っていたんですが、行かんで。今まで年に4〜5回行ってたんですわ。そいで、会えばね、『峯村ちゃん』なんて言ってんだ。酒の話になりますとね、『お前らわしなんか幼稚園だ、駄目だ』、なんてそう言ってね。で家帰るなんて言うの、『峯村ちゃん』なんてさ。酒の話になつと。まああいう人は酒で生きた人ですわね。だから近所付き合いもあんまりありませんしね、それで冬はずっと通して酒屋行ってんでしょ。ですから、あんまりね近所付き合いもないの。また家に何年も居ないし、田んぼもしてませんしね、だからねい、失礼だけどこないだ葬式なんか近所の人二人しか来てない。そんでさわしら7〜8人も葬式に出ましたしね、県の会長から、連合会からも来てくんたしね、そういう人なの。わしら酒の神さん言ってるけども、酒の神さんだけでこの一般の、社会的には付き合いもないし、一般のことはしらない。もっとも知らんで良いわけですね。酒で生きてきたんだもん。そういう方なん

です。」

黄桜とはもう一年の話であったが、新井市長をしていた現千代の光会長が醸造試験所で杜氏の斡旋を受けたいと申し込み、嶋先生と次期鈴木場長が共に推挙するということで千代の光に移ることになった。

昭和51～平成16酒造年度 新井市窪松原 千代の光酒造株式会社に杜氏として勤務する。造石数は最高時に450kl蔵人は7～8人いた。去年で380kl、今年は200kl蔵人は10人になっている。仕込みは半仕舞いでやっている。

第四節 読み取られた職業コミュニティ

次に、峯村杜氏の語りの中のインビボコードを手掛かりとして、酒男がどのような自己イメージを持ち、どのような集団に帰属していると考え、どのような価値・行動規範を身につけ、どのような交流をしているのか、を順に見ていきたい。

(1) 自己イメージ

酒造従業員の方々が自分たちを何者であると捉えているのかを知るために、まず、酒造従業員の世界で使われている、人々を分類するための生きた表現（インビボコード）を見ていこう。峯村杜氏の発話内でゴチックで示した言葉がインビボコードである。それらのインビボコードに関連する語りを纏めて、カテゴリー名を付して表題にしてある。表題のカテゴリー名にはフォークタームを使用した場合もあれば、テクニカルタームを使用した場合もある。

イ) 杜氏・蔵人・酒男

ちょっとまた話変わるんですけども、酒男ていう言い方と、杜氏さんていう言い方と、蔵人ていう言い方ありますよね。それでわれわれ一般の世界では、酒造従業員全体を杜氏さんて言うことありますけども、酒男の世界では杜氏さんと言えば、

「親方」

親方のことですね。

「はい、そうです」

それから、蔵人て言った場合に、例えば瓶詰めとか、ラベル貼りの仕事をしているだけのパートの女性の方とか、

「そういうことはありません」

はいはい、入りませんね。

「はい、」

事務員の方も入りませんね、

「はい、はい、店の人て言う」

ああ、店の人ていうんですか？

「はい、なんであれかねい、店の人て言った。で、蔵は蔵、店は店ね、はい、」

蔵の主人の家族も、やってない限りは蔵人に数えませんよね。

「はい、入れませんね」

出稼ぎじゃなくて、若い通年勤務の酒造工の方いらっしゃいますよね、ああいう方は酒男て呼びますでしょうか？

「いや、言いませんね。」

言わない、そうすると酒男というのは昔の出稼ぎ時代のことを、言ってるっていいですか。

「ですね、酒男ですね、」

それじゃですね、精米専門の方は蔵人と言ったのでしょうか？昔です。

「蔵人と言いませんね。」

それは米搗き杜氏とか？

「搗き屋」

搗き屋って言ったんですか。

「はい、」

成る程、

「ほで、黄桜行きましたらねい、あの搗き屋も杜氏て言うんですね、おいで、福井県からね専門でね、10人も15人も連れてくるんです。それで、**精米杜氏**て言ってね、わしら知らなかったんだけど、あの背の高い方でねい、わしらによく話なさって、いい人でね、そしたらね、自分で纏めて20人なら20人とか連れて来んだって、そいで、黄桜にねいこんな年寄りもねいみんな来んだわ、そしておばちゃん方も瓶詰めの方へ、そしたら若いもんにみんな任して家を任して、ほんで年寄りみんな用事ねいから、瓶詰めの方へおばちゃん方来たり、精米に来たり、この腰曲がって、そんで酒飲んで、飯食らっかって寄宿舍で寝て、そいでパチンコに行くんですね。おーあの時分黄桜に行くとよくパチンコに行っていましたね。金ほら家の若い者に任してあるから、金送らんで良いわけ、で、自分取ったのをまあ、みんな使うてわけねいけどね、いや俺3万負けたとか、勝ったとか言ってね、風呂や行くとね、9時頃風呂や行きますと、わしら仕事して行くとね、パチンコに行ってきたわ。そして、おまんたあれかていうと、『うん、おら家のもん、若いもんに任してあるから我々はい用事ねんだ、取ったりずかけだ』なんて言ってね。そいでおばちゃん方もねい、電話掛ける、わし守衛がね、横の話なるけど、わし車で行ったんです黄桜に、大滝さん乗せて、二年往復しましたね、車向こうへもってってあんでしょう、で守衛が知っててねい、『峯村さん今日守衛、他の人間頼むけど、酒、俺他人の酒10本も買うからあの家へ送ってくんねいか』て、その人がねい天理教の役員なの、そいでね30本ばかり他の人の分買ってねいそんでわしの乗用車に載してね自分も一緒に行くわけ、大阪なの、30分も行けば道ですからねい、で行きますとね、『天理教の命』って踊ってんですわ。そいで『ここで降ろしてくれ』てそいでわしと一緒に来んの、でわし電話掛けるというとね、今日は内緒の話だ、『峯村さん電話料いいわい』、

あの自分ちょっと長く掛けると2,000円位になっちゃうんですよ。京都から、で『峯村さん電話料いいよ』『あそ
うかいいか』『いいよいいよ』『その代わり車賃全然出さんから』『ああそんなの要らん』でわし酒送ってる間は
ねい、他の守衛一人交替するの居るのね、その人に頼んで、でわしに電話代ただ、その代わり月に二回ぐらい、車
酒持っていかならん。そんな人いたったですけどね。」

その方ももちろん蔵人に入りませんよね

「そうです、」

それから、今の話、糠杜氏ですよ、

「そうそう糠杜氏」

越後には米搗き専門の人はいたんですか？

「いませんね、頼まって行くのもいますけれどね、でもやっぱりそういうのは杜氏が頼んでいくから一応蔵人でや
んですね。」

そうしますとね、蔵人と言いますと、広敷番、働き、釜屋さん、二番さん、槽長さん、麴屋さん、もと屋さん、頭、
杜氏といった一連の方々が入るってことですよ。

ロ) 検査技師

それから、今大手の蔵で大卒の検査技師みたいな方いますよね、ああいう方は蔵人の仲間に入るんでしょうか？普
通はいわない？

「言わないですねい。黄桜は大学出はいっぱいいます。ほんでね、あ余計な話だけど、蔵の仕事わしらと一緒にね、
黄桜の社長さんてのはねい、わしちっと話したけれど、大学出た何出たていっても一年は造りの方させるの、權突
きから、ほうでわし行った時ね、大学のね、30人ぐらい志願あってそのうち5人ぐらいか採らんでしょう、自分た
ちはエリートだと思ってるのねい、それが割烹前掛けして權突きさせんでしょ、ほいでねわしにね、『峯村さん、
わしらこんな仕事あれかねい、權突きなんかしたり、粕抜きしねい、なかなか』割烹着着て粕抜きするわけ、難儀
仕事、『いやあんだね、わしも聞いた話だけれども、ここの社長あんだがたねい、わしらもう酒屋もんで終わりで
上がっても、杜氏で終わりだけれども、あんだ方もう全国の支店長になったり、課長、部長になれんだから、こ
この社長てのはあんだ方大学出を、あんだ方エリートコースなんだけれど、もうそこらへ全国へ出しても、造る方
を全部お客からお聞きしても説明できるように、全部やらせんだって』『あそうかね』『もしそれやらなかったら
他のきゅういいきなさい』『あそうすか、じゃ一生懸命やります』なっていったね、もう全部させるんだ權突きか
ら粕抜きまで」

朝日山もそれやってますね

「朝日山も、そうしたら大学出は優秀のばっか来ていて、何十人の中から試験合格して入ったんでしょう、だから
自分たちにしりゃあ天下の黄桜でエリートだと思ってるのにな、割烹前掛け着たり、權突きしたりさあ、なんか
みんなさせられる訳、そいでほら蔵の人もハッパ掛けるしさあ、こんな仕事でなかったたまげるんでしょう。そ
れでわしらに聞いたんだけれども、『わし杜氏補佐なんだけれども、他で杜氏やってきたんだけれども、スクラッ
プだて言われて来てんだけれども、あんだ方でもここ入れば1〜2年はねい小僧と同じで掃き掃除、ヘリコプター
なんて乗る者は三年もヘリコプター磨いてる、なんて聞いてんだよ』という『ああそうですか』もう二三年ぐら

いねい權突きしたり粕抜きしたりしてハッパ掛けらってそれで造る方を会得して、それからもう販売も行ったり、小売りも行ったりして部長になったら、われわれはもうこの歳で終わりだ』、ていったら『あそうですか』『駄目だったら、あんた早く他行った方がいいよ』ていったら『そういんですか、がんばります』なんて、そんなのいっぱいいましたねい。」

ハ) 大杜氏と名杜氏

それで、またちょっと話変わるんですけども、私色々の方に伺ってますと、昔の立派な杜氏さんの中には、例えば酒造従業員組合の組合長やったり、杜氏さんを色々斡旋したりする大杜氏（おおとうじ）

「だいとうじ。」（吉川町の富岡武二氏は「おおとうじ」と言われていたが、頸城村の峯村氏は「だいとうじ」と言われた。）

と、それから自分の酒造りの世界しか目が無くて、人間関係どうしようというよりも良い酒造りたいという技術的にぐーと深めようという名杜氏さんていったらいいのか、そういうタイプのかたと二通りに分かれると思うんですが、

「ああ、そうですね。ありますねい。」

大滝さんあたりはどっちだったんでしょうか？

「大滝さんはでもねい、神杉に居なったときにねい、だいぶねい、5～6人は出しなっただねいすか。はい、で後もう、黄桜に行きましてからはねい、弟子一人も出さんのかなあ、神杉いった時は出すども一年ぐらいで戻ってくるのいっぱいいるんだね、でそういうのは叱られてさ、あの黄桜も入ったりねい、それから色々ありましたねい。杜氏さんに出してもらって、さんでしてこういうの出来ましていうたら、ぶつけたとかね、蹴ったとかあの人もねい、ですから初めは、あんでも十人ぐらい出しましたかなあ、大滝さんもね、そいで後は局へ言ってくるもんだから出しなでねい、そいで我々みたいに杜氏やってきたのものは、であのほら勉強に、そいでわしも行ったときに、わしの前に2～3人杜氏辞めたのも行ったり出たりしたのかな。そいで、行った途端にねい『いいか、峯村、俺んどこ来いやなあ、杜氏やってきた、頭やってきたてのは、全部スクラップだど』初めに脅かすんですね。『その代わり、いくらぼろはぼろでも金は金、銅は銅で拾うど』なんちゃってねい。一発脅かす訳よ、ふふふ、『まあ、よろしく願ひします、スクラップでございます、弟子一つ願ひします』『よし、あのな、スクラップだすけな、あのな、ただしな一生懸命やれば金は金、銅は銅で拾うど』あとひとやまの腐れです、ははは、いや初めぼろぼろにしちゃったですは。その前にもね、わしに研究会で一緒なんでしょ、ほいとね『静岡のそんなとこで腐った酒造ってねいで、俺んどこ来い』って言うんです。あの人よく腐った酒でいうんだ。ははは、そいでわし黄桜行ったときもねいちょっと怒るとねい、『峯村の野郎なんだ静岡で腐った酒造ってきてなあ』、ははは、ちーと虐めるてかねい、叱るんですねい。『は、腐った酒造ってきました、弟子一つよろしく願ひします』『よしよし、いやいや』とか言っちゃって。もう『こりゃ良い酒だ』なんて言うと『馬鹿野郎』へへ、そういう人なんですわ。初めは出しなすったんじゃねいすか、もうなくなったけれど鈴木、それから外池、だいぶいたな石神の内藤庄次郎（石川の登代正宗）、それから十人ぐらいいるな、それあの時分神杉ていうたら有名だったですからね、あの時分神杉ていうとそこら中に出しても賞に入らんこと無いですね、そんで名杜氏だったですね。で他の酒屋、試験場の先生方、『大滝さんどうかうちの杜氏心配してくれ』でしょ、ですから頭、もと屋とか三役ぐらいのね、お前弟子だろうて出すんです。そのかわり、ちょうど面倒見、最初の時は面倒見てくたさんでしようけどね、そういうことありましたねい。」

石田さんはどうですか、やっぱり

「石田さんもだいぶ出しました。あの方もね、静岡の近所ね、自分の親戚なんかおったり、そんでも7～8人も出

しましたね。はい、」

(2) 所属集団としての頸城杜氏

次に、酒男たちが、自分たちはどの集団に帰属しているのかということに関連する、発言を拾っていこう。

イ) 頸城杜氏

それで、先ほど頸城村の酒造従業員組合の話、伺ったんですけども、杜氏のあるいは酒男の方が自分が所属していると思っているのは、新潟県酒造従業員組合連合会の各支部って言いますか、頸城支部とか、小千谷支部とか、寺泊支部とか、そこに所属しているっていう意識が一番強くって、実際の交流もそこを中心にやっている。

「はい、そうです、県の方は役員だけですね」

そいで、新潟の杜氏さんの歴史みたいのを読みますと、新潟には昔、頸城杜氏と刈羽杜氏と三島杜氏ですか、それで野積は三島杜氏の一部に含めたというように書かれていると思うんですけども、その頸城杜氏と言いますと、柿崎から松代の方まで入りますよね

「一緒ですよ。」

それは、一体感を持つために何かやってたと言うことはあるんですか

「特にありませんね、」

そうしますとね、たとえば自分は頸城杜氏であって刈羽杜氏ではないとか、三島杜氏ではないといった意識を持つ場面は酒造りをしているときにあるんでしょうか？

「いや、そう言うときありませんね。」

流儀みたいなもので、三島杜氏はこういう酒を造るとか、頸城杜氏はこういう酒を造るという意識もありますか？

「うんと、別にありませんね。」

じゃあ、越後全体で考えて、他のたとえば能登の杜氏さんとか、南部の杜氏さんとかと交流があったりしたときに、自分たちはこういう酒造りで、あの人たちはこういう酒造りをしているという意識はありますか？

「そういうの別にありませんね。わし静岡の時、南部杜氏、それから石川の能登杜氏さん方、七場ありましたから、そいであの時わしも役員やりましてねい、一緒に飲んだり、話するときもあるけど、別にそう言う意識ありませんねい。」

一般的に、個々の杜氏さんは別として、全体的に見て南部杜氏さんは越後杜氏と一緒に淡麗辛口を造ると思うんです

「ああ、そうですね、」

能登の杜氏さんどっちかと言うと、濃醇

「濃醇，濃いんです。」

そう言うことは、お互いに意識しているんでしょうか

「別にあんですねい、その蔵蔵で違いますからねい。そうだね、今でも開運ってねい、この前新潟で会いましたけどねい。」

土井酒造場、波瀬さん

「まだ来てる土井さんへ、昨年にねい新潟へあこっからだいぶ来ましたわ、そんで久しぶりに会いましてねい、ほんでねいお前まだ杜氏やってんのかい、てね、向こうもお前さんて言ったりね、そういいますけね、ようし、会いました。」

静岡の時にお会いになったんですか？

「隣の蔵にいたんです。」

隣なんですか、ああー

「はい、それで二人も三人も、もうとつくに辞めた人もねい、町会議員かなんかしててねい、偉いなった人もいい人でねい、そう言う人さんざん一緒だったですわ。向こうの人も話し出すとねい、越後の人間根性いいけど、向こうの連中もいいんですよ、話しよく合うんだ。南部の人とも一緒だったけれどもねい、南部の人はあまり喋らんかったですね、」

大人しいかも知れませんね、

「で、新潟の跡にどんどん食って入ってんでしょ、だからねいみんなあの、南部に変えるって良くそう言ったもんです。何で、南部ていったら、南部、家いってもなんも仕事ねいから、その給料安く、長く居たいんだって。で新潟の杜氏は、田んぼで早く行かんならんすけ、仕事早く、そう言う評判あった、静岡居る時、だからねい、あのなんだあ、試験場のねい、あれなんだあ、あの先生、もう亡くなった西条先生とあともう一人、その先生方良くそう言いなされたもんだわ、南部杜氏の蔵はあの長く居るって、ほんでねい主人側からすれば給料安いから南部杜氏いいけど、結局計算すれば新潟のものら、田んぼあるから給料高かったって、日数はいねいから安上がりだなんて、言ったった。よーくねい、先生方そう言いになったわ、」

ロ) ライバルと仲間

それからちょっとまた話変わるんですけど、峯村さんが酒造りやってて、同じぐらいの年齢の方で、あの人には負けたくないとか、あの人と競うぞていうようなライバルみたいに思ってた杜氏さんいらっしゃいますか？

「そうですねー、別にライバル、負けたく、まあ良い酒造らにゃとは思うけど、特定の人に、あの大将に負けられないというのはあんですね、まあ、関信もトップ二回になりましたしね、良い酒造るてのは一生懸命ですけどね、特定の大將に負けられないというのは、わし弱かったですね。ただ、良い酒は造らんかなあと。」

峯村さんから見てあの人は良い酒造っているなあとと思われる方は、

「うんそれは、います。」

例えば、どなた

「鵜の木鈴木（鈴木健、S6年生まれ、黄桜酒造杜氏）とかね、あの人はねわしとね若い時、静岡で一緒だった、最初の年かなあ。」

5年の杜氏名簿もってるんですけど、鵜の木でどこでしょうか、

「あの坂口記念館のそば、」

平成5年ころ行ってましたか

「はあ、」

あああった、金印黄桜

「大滝さんの後、わしの後、わしね千代の光後ね行きなつたの、それで大滝さんの跡もらったわけ、（トイレで中座される）・・・いままたあそこ行ってます、新潟の、場所ちよこちよこ変わる。えーとね、あそこいたんだ、三条のね福顔、福顔を辞めて今度藤ノ井かな、だと思えますがね。そこ行ってます。それと今でも仲良くしています。」

その他は、

「そうですね、仲間いっぱいいたんだけどみんな辞めちゃった。やってるのは柳沢明義（頸城区天ヶ崎）、それはあの魚沼のほれあれ苗場山ですか。その人は今でもやってますしね、それからあとは中城（なかじょう）の上原てのはやってますわ、上原義男。新井の猿橋の鮎正宗。あっこにもう4～5年。その人も長野行ったり他行ったり、今鮎正でずっとまた、」

先ほどお名前が出たのは内藤庄次郎さん

「ああ内藤庄次郎、あれ辞めましたけどね石川の登代正宗（とよまさむね）行っていましたね。その人も大滝さんから頭されて」

田中清一さん

「田中清一、今辞めて。神杉、その人は大滝さんの跡もらって、それで去年、今年辞めました。そうだ、田中清一それみんな仲間です。」

そうしますと、あれでしょうか、自分たちがいつも研鑽しあったり、いつも情報を交換するっていうのは、頸城村、旧頸城村の杜氏さん仲間と言うことになりますか

「はい、はい、そういうことです。」

(3) 準拠集団と職業文化

今度は、自分たちが、酒男として、蔵人としてそうした頸城杜氏集団の中でどのようなことが重要で、どのようなことをやってはいけないのか、に関する発言を拾い集めてみよう。

イ) 人は人の揉まれて人になる

「あの時分米なかったすから、町行ってねい、あの時分女の方ひねり餅食うとお乳出るんだそうで、それくれいく
らて言うんだわ、親方が、それで魚もらって、魚屋行って魚もらってきたりねい、そんでわしなんかねい、まあ釜
屋やった時分もまだ布団敷いたかなあ、杜氏さんの布団敷くわけ。釜屋夜なべしねいでいいから、その代わり朝餉
一時半ぐらいに起きるでしょう、みんな他の人八時まで夜なべって言うのをやるんです。仕事あってもなくてもあ
の時分、夜なべやらせんですわねいみんな、そいでわしら早く休む代わりに杜氏さんの布団敷くわけ、布団敷きに押
し入れ開けますとね、布団出すでしょ、その上にねいこうなごとかね魚買ってきたのいっぱい、若い衆がお前布団
敷くんだから取って来いて言いつけられるわけ、取ってかんと悪いし取って見つかれば大事でしょ、ほいで杜氏さ
んぐーっと蔵回っている間に布団敷き行ってね、上の方こうなごとかじっと取ってねい均して分からんように、悪
い事したもんだ、で若い衆『取ってきたかあ』てね、そいでなわけてやってさあ、それまたうまいとかレクレーシ
ョンですね、テレビもねいラジオもねいでしょう。そいで若い衆、わーって笑ってるでしょ、若い衆飯食ってどっ
かで見てんでしょね、『その上にスルメみたいなすけなあ、あれも明日ちょっと分からんようにちょっと上手に
裂け』なんてね、自分た見つかりや叱られるんすけ、わしら早く休まれるんすけ、だから杜氏は夜なべにずー
と買い付け一緒に行ったり八時まで来ないの分かってるんです、ですからねい時間十分あるわけ、取る時間ぐら
いは。それ言いつけられましてねい、悪いなあって思ってもねい、ほら先輩に言いつけられりゃあ、そっちも言うこ
とときかんきゃならんし。あんですわねい、まあ見つけられればねい、まあ謝るし、それから見つけられたらしょうが
ないすわねい。そういうのもありました。うんですからあれ賢くもなるんですわねい。だから要領もよくなったり、
勉強もしねきゃならんし、品物も良く出さんきゃならんし、それからまた上のものに言いつけられりゃあ、やっ
ぱりねい、要領も良くやらんきゃならない。だから昔の人はよく言ったもんすわねい。そいでわしねい、こんなのあ
れかなあばか、釜屋だか麴屋の頭来ましてね、『人は揉まれて人になるんだぞ、幾ら叱られてもお前なあ怒っちゃ
だめだ。お前を教育して、おらも杜氏もお前を教育して人間にしねばだめなんだから』、『は、ありがとうございます
す、』『いいかお前も百姓だろう。稲はなあ、稲は水に揉まれて稲になる。人間はなあ、人に揉まれて人になんだ
ぞ』『はあ、ありがとうございます』はははは・・・」

「はい、わし最初にねい、この17年に（山下酒造）行ったときにご飯しにいった、飯炊き。」

それを広敷番の仕事にしてるんですか？

「そうそう、そいでご飯炊いて、あの時分煮物して、こう一人ずつ付けるんですわね、あの当時、今ならだんだんで、
ほいで鮭とか配給でしょう、配給、店の番頭さんかなんか貰ってねい、町の魚屋に買いに行く、ほいで今度それ煮
て、それで昼飯の時七人いたったかなあ。一人ずつ付けるんですよあれねい、皿に。ほいたら槽長てのはねい、昔
軍隊のご飯しは軍曹というんだそうですね、ご飯するの輜重兵の一番偉いのが軍曹だそうですね、でなんで軍曹だ
ていったらね、そういう謂われ聞きましたこてね、そうしたらね前の家にやったのがねい、またわしんとこ来てそ
れまた槽長だつて、ほいでねい『ご飯出来たか』てきてねい、いい肉でもなんでもべろって食ってっちゃうわけ、
それにゃあ困っちゃった、怒らんねいでしょう、配給ですから、だつてそれまた細かにしたりさあ、自分のやつね
くしたりね、それねいまんがくなって裸足で流しから来てさあ、『おい軍曹ご飯出来たか、どうだ今日何だ、うん、
あ味いいぞ、もう一つ』食って行っちゃうでしょ、『おい足らん』ていったつてだめだろ、槽長だつて偉いでしょ
う、ほいでそれまた細かに切ってねい、拵ってさあ、俺なんか自分のねくして、そういうのあったですね。また夕
方なつと来んだわ、ほいで酒飲みに来て、ほいで今度番頭さんに、『いやあ番頭さん申し訳ありません、晩酌ねい
から』『一週間分出したけな』『はい、いや申し訳ありません、いや勘弁してくんなせい』槽長来て飲んでて言え
ば叱られちゃうすけ、ほいで『いや申し訳ありません』、今度新酒できてりゃねい若い衆ほかほかって入れてくん
だ、自分ら飲んだだけ、出来るまで番頭さんに謝りにいかなきゃだめ、『番頭さん今日の晩酌無くなりまして申し
訳ありません』『うーん、しょうねつかねい』『はい、いやわし今日よく見たら有りません、まあ測り間違いした
のか、誰か飲んだのわけねい』、向こうは知ってんだけどねだどもわしを虐めりゃ可哀想だから、『あそうか、じゃ
ほんとにいいから言ってやるわ、試に落ちて』そういうこともありましたね。それ年中じゃまた叱られちゃうでしょ。

いやあそういうこともありましたねい。一番下っ端だから、やっぱり虐められる訳さ、それも人に揉まれて人になんだから、ほいでわしねい、あの時分しょっちゅう泣いてたのかなあ、そいだら頭来て、『いっかいくら虐められてもなあ、おまえあんだど、戦場だと思え』てね、へへへ……。そう言ってねい、だから他のもんにしると、またゴーンとやられますさけね、自分で堪えてねいか、そしたら今度はねい、あの新酒出来ましてからねい、二番かなんかねい『今さあ酒ねいわ』、『あそっかそっか、俺行ってやるわ』ってね、そして自分たち来ていつも試んどこ行く、その新酒出来るまでは大変なの。一月ぐらい、それ番頭さんそこ頭下げに行く、番頭さんも薄々は知ってんだいね、『この軍曹は自分では酒なんか飲むことねがね、誰か飲んだんだあな』、ってね。『あれ飲んだ、これ飲んだ』て言やあね、足下見られちゃう『この野郎、馬鹿だなあ』と思うすけ、『申し訳ありません、誰も飲んでねいと思うんだけど、わしのはかり間違いかも知れません』、ああ、『よしよし、それじゃ入れてやらあ』てね、そういうこともありました。何だって俺一番下ですからね、ほほほ、……。』

ロ) 良い酒

話ちょっと角度変えて、一番いいと思うお酒ですね、こういうお酒だ、どういうお酒でしょう

「一番いいお酒ですか？うーん、まあ坂口先生じゃねいか、水の如く滑らかに飲めるなんて、あの人終いに水しか飲めなくなったすけねい、喉ごしが良くてあとが残らない、さらっと入る酒でしょうね。」

それはあれでしょうか、新潟の杜氏さんはみんなそうおっしゃるんでしょうか？

「と思いますね。」

成る程、そうおっしゃらない杜氏さんもあっちの方にはいらっしゃるんでしょうね

「薄っぺらなのはいやだって言うかしらん。」

それから、近年大手の蔵で、融米造りとか色々やっているとすけれども、地方でも融米造りやっているとすけれども、ああいう物はどうお考えでしょうか？

「いやー、まあ、色々やつ出来てますけれどもねい、やっぱりうちの社長じゃねいけど、米もったいないけど白くしてあんですかねい、さらっと飲みやすい酒の方がいいですかねい。わしもゴツツイ酒嫌いですからねい、さらっとした酒、飲みやすい酒が良くなっちゃいますねい、」

濃醇なお酒と融米造りのお酒またちょっと違いますよね

「そうでしょうねい、違いますね。だからこれから嗜好品だからどうなりますかねい。それぞれ人によって違いますからねい。」

それから、峯村さんの場合、吟醸系のお酒と純米系のお酒ってありますよねい、お酒の向いてる方向ちょっと違うんじゃないかと思うんですけれども、どちらのお酒がいいと思われますか？

「うーん、わし、」

どうしてそんなこと伺うかという、近年特にあの新酒の鑑評会あたりは、匂いの強い飲んだらあとちょっと苦いつてか、

「あんまり強すぎて、」

何杯も飲むとあんまり美味しくないとか、いわれますよねい

「はい、」

でも売ってる吟醸酒てのは美味しいですよ、鑑評会みたいのとは違って

「あれと違います。」

あれ特殊な変な香水みたいな

「香り付けちゃう、雪中梅の親父よく魔法の雫っていったもんです。『魔法の雫、杜氏入んねいかだめだぞ』、なんてね。よくねい、それからうちの社長なんかねい『あんなの入れて入るようじゃ入らんでいい』て昔よくそういいなったもんです。ヤコマンての、」

はい、ドレインですか、

「ドレイン、まあ、わしあれ入れたの嫌やいすけどな、」

...

Sさんにもお話伺ったことあるんです。

「Sさんはね、わしら試験場一緒にねい、わしより下だけれどもね。そいで嶋研の仲間、室岡（春隆、糸魚川池田屋酒造杜氏）ねああいう連中みんな、Sさん二三年前に辞めちゃってねい、」

そうですねい、ちょっと聞いた話ですと、Kの若い主人があんまり良くないみたいで、

「ねい、奥いって怒ったなんてそう言ってたなあ、そしてたんだら、三年ぐらい前かなあ、もうはい去年あれ（倒産）しちゃったけれども、なんだ酒売って金入るとねい、米買ってきてねい、これから精米するすけ杜氏造れてね、そいであの、添え、仲、留めは仲でやめてねい、二三日したらまた造れて、おいてね、『弱っちゃった』てそう言ってたんだ。年寄りに泣かれすけ、『まあ杜氏さん来てくれ』、三年ばっか前かな、『そいでも行くわ』て、そんだの若さんねい、若い衆が金くれらんねいって言って、若い衆首にしたんだって、あの店出る人、で『来ねすけ何だ』ていったら、『いや俺銭払われねいから首にした』て、そいでね奥に寝てて出て来ねい、そいで杜氏怒って、中さあ起こしてきたなんてそう言ってましたけどね、あの年寄りの旦那はねい利口な人だったんですわ、などもほら株かなんかであの時分二千万ぐらいで、これやっちゃった、それで帰る前の日までねい杜氏酒飲んでさあ、杜氏家に来たら次の日、これやったんだって、そいで家来たら、『大変だ酒屋へ来てくれ』て、『なんだて一緒に飲んでたねっか』、その方はねい、わしらよく局と一緒にいったりね、あの人はカップなんか四回か五回もらったんねいかな。ねい、だから他の先生方、『おい峯村吟醸ばっか良いたってなあ、局ばっかトップになったって、他の酒悪いから潰れちゃうんだ、K見れ』なんてね、また先生方さあ、そう言うこという人もいたんだ。『いや、今年入らなかった』『ばか、お前二回も入ったねいか、吟醸ばっか良かったってな、カップばっか貰ったってだめらろ、他の酒悪いから、見れほら潰れたねっか』て、また先生方ねむかってそう言うわけ、」

嶋先生そう言うお考えみたいですよね

「嶋先生はね、そうしてわしには、わしトップになった時たからの日『峯村、これなあ材料だわ、』『材料とは何で

すね』『材料であんだねいか、便所の板なったり、床の間の板なんねいか、それやりかたど』そう言ってね。それがね、県も一番になる、局もトップになる。『こりゃ良くないぞ、こりゃ材料だぞ』、あの先生はねああいうこと言う。」

ハ) 飲むな

杜氏さん、お酒飲まれる方と、飲まれない方いますよねい、下戸で言うか、下戸を売り物にするって言うことはあるんですか、私変などこで変な話聞いたんだけど、あるところの杜氏さんがアル中になっちゃって、でトイレで倒れてたとか言う話で、いま入院しているというんだけど

「はあー、あっかもわからんですねい。」

飲んじゃいますよねい、山のようにあるわけだから、

「わしらも、飲んでりゃアル中になっちゃったか分かりますねい、ここ7、8年ドクター・ストップですもん、ちっとやりますけどねい、晩方になりますとねい飲まんくてもねい、口濯ぎたくなるんですよ、ですから、薬ずーっと。だから好きで飲んでりゃアル中になっちゃうんでしょ。いっくらでもあんだ。分析した残りだつて一升だつてあんも、だから、わしも医者に体具合悪くして、あのままいかつたらアル中で死んだなあと思ってますわね、そう言うこと有りますね、思ったこと。」

特に蔵の中には生の原酒があるから

「そいでね、わし昔ね、そこらから頼んだ時ね、原酒を飲み出すともうあの体が病氣みていに呼ぶんですよ、朝餉、人の起きぬうちに亀口行ってね、コップを隠したら手でこーやって飲む、もう飲みたくって飲みたくってどうもならんくなるすね、味が全然違うんですね。もう生飲みましたらねい、わしらもさんざん飲みましたわ、亀口の生の酒飲みますとねい、他の酒なんか飲まんなくなっちゃう。そいでねい、腹の中が呼ぶんですよ。ですからねい、わし何人もそういうの見ましたよ。そしたら朝飯、酒、人の起きぬうちに行って、見つかるでしょ、早く行って飲んで、それがまた、終いには捕めたんだけどさあ、毎日一週間隠れていつてねい、お前飲んですけやめれて言わんねいでしょ、だからねい、『杜氏さん、大将飲んでて駄目だ』、『そうさ、人のやつ見たって駄目だから、そうさおら確かめてよく注意するっけ』、そうしたら毎日毎日やりだしましたらね、朝飯食わんねいの、食ってもちょこっとだけ、そいでもう朝餉のあともう飲みたくって飲みたくってどうもならんすね、本人にあとで聞いたら、そいで足が自然と亀口向いちゃう、そいでただ注意したつてねい、飲まんの人から聞いたなんて失礼だから、亀口の所毎日隠れていてもねい、初め捕まえようかと、いやいやもうちっと待て、そいで隠れて見えねい所にいとねい、来てこーやって『はーあ』て旨そうに飲んでいくでしょ、こりゃ使つてやんねいわ、そいで今度若い衆コップ隠した、そうすつと今度手で、いよいよこれ駄目だ、今度ね一週間ぐらい見てたかなあ、ほしたら、なんか下血したとかさあ、昭和天皇で下血での初めて聞いたんだけどさあ、『布団中血ある』て若い衆いつてるしさあ、それさいよいよあんだわ、『捕まえてよく注意するわ』って、そいであんでさ、一週間ばつか見たけどさ、とてもあんだ、そば出つてねい、手をきゅと、『あああー』、手捕まえた、『さあ今日お前捕まえた』と、『ええ今日初めてやった』、『そうじゃねい、おれも一週間もここで見て、おまん分からんかったか』、『分かりません』、『とにかくあんだわ酒いくらでも主人のもんだすけ、いくら飲んだつておりゃ困らんし、水入れときゃいんだすけ、分からんすよ、分からんけどお前体が問題じゃ』と、『このごろにしが』、『みえな、それ若い衆も知ってる、おれも聞いてんだけれども』、本当に人間は良い、社長もねい、『初めはねい飯なんかも人の分まで盛ってさあ、あれ良い大将だなあ』てそう言つてたんだ、ところが、亀口出ちゃったら、もう飲み始めたらもう、・・・良く聞いたら前の酒屋もそうしてねい、飲んでて首になったんだつて、帰されたんだつて、そいで捕めたらねい、ここであんだすけ、広敷呼んでさあ、『とにかくおまんあんだわ、おれ飲むなというんじゃねいけど、おまん体さえいいからね、いくら飲んだつて良い、ただ怪我しりゃ悪いすけ、飲むな、社長も飲ませんなてそう言うすけ、おまん飲むぐらいね、水も

一杯あんだし、米も一粒でも、一滴の水も酒にしろって、みんな書いてあんだすけ、お前飲むくらい身上潰んない』と、『だが体あんだすけとにかくおまあんだわ、とにかくこちとと止めらんないかね』ていったら、『杜氏さんにそう言われれば、止めます』、そしてねい一週間ばっか止めたわ、ところがねい止めたって飲みたくて大事のね、そしてね、あんだわ、おまん、うち、家からねい、その奥さんから電話来んのね、そしたらね、『うん、そうだ、はい、そうだ』、ていうだけれど飲むな飲むなてそう言ってただけでしょ、こっちから言葉無い、ただ返事してるだけでしょ、わまた大将来たわ、おれ聞いてると、『う、そうだな、う、分かった、そうだな、うん』、『お前飲みなんな、飲んでねつかねい』そう言うんでしょ確か想像すると、『うん、分かった、うん、そうだな、うん、分かった』、こっちから何も言わんでしょ、ただ向こうに言葉で返事してるだけ、そしたら若い衆、『ありゃあんだわね、奥さん飲むな飲むな』そう言ってんだわね、そうだな、『でまあもちいとばつかね、帰ってきな』て言ったら、一週間ばっか行つたわ、そしたらねい、『いやあ体調子よくなりました』なんてね、は、は、は、は、『ほーら見ろ、お前こんだ飲んだっていい』と、『いいけど、とにかくきちんと飲まん、生でゴクゴクと飲んじゃ体悪い、悪くなっちゃうんだすけ』と、『前にもあんだよ、生飲んでって肝臓悪くして、頭に来て、頭悪くなったの居るんだよ』て言ったら、『はい分かりました』、人間素直なんですよ、叱られりゃ、『はい分かりました、今度は飲みません』、てそういんだ、でも体が要求するんですね、ほんでもね家帰ってきたら大分良くなって、またね、ご飯も食べるし良かったんですけど、やっぱり駄目だ、ほってね、でも、早く帰すけ、3月の6日ぐらいまで置いてくれって言いたかな。それで、若い衆みんな『可哀想だねい、帰ってけ、帰ってけたって可哀想だがね』、『俺だってせつかく頼んできたがね、途中で帰いりゃね、あれ酒屋行って働まらんで帰って来たって言われるすけ、せめて三月の声掛からんば、俺帰されねいわ』、て言ったら、『そうかい』て、そいで三月入ってからね、ほいたらねいや自分で『いや帰ります、ありがとうございます、お世話になりました』、『おまんとにかくあんだわ、酒飲まんだらほんとに、俺も惚れ惚れする人間だっけも、もうとにかく酒が悪いんだ』って、『酒はおまんの敵だ』て言ったら、『はい分かりました、もう家帰ったら飲みません』そう言ったら、どうだらねい、そういうことありましたねい。もう飲み出したらねい、わしも若い頃そうだったけど、飲みなくなっちゃうんですね。あの生のそのスーッとしたとこが美味しい」

二) 寝坊

杜氏さんの話はあれなんですけど、次に酒男自体に向いていない人ってありますか？こういうタイプの人は蔵に入っても駄目だって言う

「そうですね、」

結構昔のお話聞いていると、一年ぐらい出ても二度と行かない人とか、

「有りましたねい、そういうのも有りますねい、そうですね、今寝坊だって良いんだ。昔は寝坊の人はね、起きてもねまた寝てねい、泡こぼれてんのもあんだわ。昔はねい、昔は静岡でもありましたけどねい。寝坊だていいですか、寝癖悪いって言いますか。番、頭が一時間ごと番札書いて、お休みなさいっていってみな休んですよね。そいで明け二とか、明け二てのは。一番宵番てのがみんなが休んでから、自分らが寝ねいうちに一時間やるでしょ、それ楽なんです、ものすごく楽なんです。そいで明け一てのが一番楽なんです。宵二とか、一時間寝てすぐ起こされるでしょ。そいで明け二てのは、明けから二番目で、あんだから起きてもあと一時間寝れたって、起きちゃうすけ。だから一番嫌うのは明け二と宵二なんですわ。寝たすぐとか、宵三とかはね起こしてもちゃんと起きんだそうです、こうやって、『えい分かった、うん、よし、俺の番だねい』って、そいで、次の人に『任したよ』て寝ると、自分でころっと寝てさあ、二三時間寝ちゃって次のもんも起こさんでねい、で行ったら、ばちゃん、ばちゃん、ばちゃん、蔵中濡れてた。」

泡吹きちゃったら駄目ですねい。

「昔はねい、昔は、ほいでほら。今泡消し機ですからねい。だから電気だけ。あのこういうことあんですわ。泡消し機の差し込みを、泡消し機の電気は、電灯消しても泡消し機が消えねいスイッチがあるんです。そこへ差し込んでおかんと。それ間違えて、他んとこ同じと思って入れたら、ここで電気消すと、ぼって消えちゃう。そいで蔵入ってくるとき点いてんのに、自分で向こう行って消すと泡消し機が回らなくなる。そんで困ったことがあんですわ。ほいで、よく考えたら、俺いったら回ってた、回ってたって自分で蔵出るとき消してた、違う差し込みに入れちゃうんです。そういうのもね、わし蔵行ってからみんな×して、だっけ昔そういうのあったんですよ。そいで回ってた回ってたても行ったら、ばちゃん、ばちゃん、ばちゃん泡こうこぼれて、そいでよく考えたら向こうで消しゃ消えるところへうっかりして差しちゃった、だっけそういうのほらねい、ほんとに×にしねいかならんのをほら、移動したりなんかしんとき差し込みに使ってたんですねい、そういうのありましたねい。ですから、昔の泡番てのは、そういうのねい時は棒で消したんです。ですから、あんですわねい、あの寝坊で起きねいのはなんぼも困っちゃう、朝餉までみんな掃除して、自分では寝らんねいし、他の若い衆はみんな起きて掃除しねきゃならねい、そいで今度や、店の方へ分かりゃあ、首になっちゃうから、店の方には戸をみんな閉めてて、そいでみな拭かんかならんない。だから、昔ってのはひでい目にあったんですねい。だから、頭の良いのはねい、泡消し機をタンクの下に入れて、腰掛けもってってそんで休んで、タオル巻いてんのいた、どうなってんだ、ほんとにこう、そういうのこうあって笑い話ですけどねい。そういうのもあったですね。」

木) 杜氏の資質、人の和と帳面

さてそれで、酒男の世界で、若くから峯村さんみたいに杜氏になれる方と、生涯なられない方いらっしゃると思うんですけど、どういう点が違うって言うか、杜氏の資質として大切なことって言うのは、技術とか知識ってのがありますよね、酒造りの、それから性格的な面もありますよね、それから人間関係もありますよね、それからあの杜氏になると帳面付けたりもしなければなりませんよね、で一番大切ななんでしょう？

「どうでしょう、みんな大切ですけどもねい、若い人の統率かなあ、和かなあ。」

そうおっしゃる杜氏さん多いんですけども、蔵の中がぎくしゃくしているようだと、いい酒出来ないってことですね。

「そうですね、」

わたし、中川酒造で佐藤源司さんにやらして頂いたときに、

「ああ源ちゃんね。」

泊まって、実際に造らせて、参加させて頂いたんですが、

「あそうですか、」

その時に、見てて思ったんですけども、たとえば、さきほどの役職で釜屋さんとか、麴屋さんとか、もと屋さんとか分かれていますけれども、実際に作業する時はみんな寄ってって、一緒にやってますよね、

「そうです、」

だから、阿吽の呼吸でどんどん進めないと、巧くできないんだなあて良く分かったんですが、

「そうです、」

そりゃ、当然仲の悪い人が中に入っていれば、

「そうです、」

とってもうまくいかない。

「うまくないです、ねい」

そういうので、杜氏さんが誰と誰と連れて行こういうとき、あの人とあの人ならうまくいきそうだ

「そういうの有りますね。」

あらかじめ考えて、

「はい、」

声を掛けるとか、

「そうすね、いやねい、やっぱりねい、あの今はあんだけど、昔は人間頼む時ね、あの人どうだってそういつてくれんでしょ、とやっぱりねい、ちょっと、本当に頼むまでにちょっと聞いてね、まあ我慢しられる人とね、まああいつはちょっと駄目だて人といいますからねい、いや前の酒屋で喧嘩したとか、酒盗んできたとか、手癖悪いとかさ、蔵中金どっかいって問題になったとか、いうのはありますからねい。それから、そこらに飲みに行って金払わんで、なんか蔵まで警察来たとか、いや主人来たとかいうのありますけね、そういうの予めちょっとだけ聞いてね、あとまあ、酒屋行って飲むのは困っちゃうけども、初めは飲むってのあまり分かりませんすけねい、あとで良く聞いたら前の蔵でも酒飲んじゃって、とても駄目で帰されたとかねい、でも仲間が良いからあの勤まるのもあんですよ、だから持つべきは友人なり、悪友持つべからずっていいですけど、やっぱり仲間がいいですとねい、あの人間ちょっと前に聞いたら良くねい、そう言っても、同じような人で仲間が良いとね立派に勤めんのあるんですよ、わし静岡の時ありました。三四人。高校の同級生で、ほいで一人ねい駄目だて話だったけれども、三人ぐらい仲間良いとね結構立派に勤めちゃう、感心するほど、だからそう言うのありますからね、ですから、まあその人によってと、その蔵によって、それから指導するものと、ですからまあ和でしょうね、和と技術て言いますけど、和が先でしょうねい、」

それから、さっきの生涯杜氏さんにならないで終わる方いると思うんですけども、杜氏さんになりたいと思われな
い方も酒男の中にはいらっしゃるのでしょうか？

「うーん、でしょうねい。」

たとえば、あんな大変なのちょっと

「そうそうそう、帳面面倒臭いてのもありますから。なかに、もう、麴なんかものすごく上手に造るのいんですよ。けどやっぱりねい、計算なんぞ嫌だての。」

大変ですよ計算は、

「億劫なんでしょうね、だからそう言う人もいますつけねい。杜氏やんねいか言うと、おれ杜氏なんかやんねい。」

杜氏さんて最初蔵行くと醸造計画っていうんですか、何日にどんだけ蒸米造るての、あの表大変ですよ、どうやって作るんだろうって、

「計画表作りますからね、最初ね。そうして、初めての蔵行きますとね、わし静岡とか黄桜なんかでつけかったですからね。あの高田の気温も低いでしょう、一月ぐらいねい仕込み配合をみんな変えてね、税務署でたまげたって言うんだ。『あの峯村ってやろう、うんだらしょっちゅう申告変えてんがあれ酒になんのか』、てそう言っただけ。税務署でたまげるくらいですからね、このまえも社長話した、杜氏さんあんたおらんち来たとき、さんだ、いやあのねい昔はありゃこうりちも口元にあったり、昔の配合ではとてもねい、そいできんてきんてアルコールブレイキ掛けたり、切れちゃうからアルコール途中で掛けるわけ、ブレイキで言うんですわ、ブレイキ入れてそんなアミノ酸多くなった酒なんかねいとても飲めるもんじゃないすからさ、おいで前のやつとね、静岡んときと、黄桜でつかくて22トンもありまから、もう何十倍でしょ、だっけ、そんなのも当てにならんしね、歩合はみんな出したって、その配合じゃやっぱり駄目ですね、ほんでね一月くらいね、配合一本ずつみんな変えたぐらい、ですから、やっぱりその蔵変わりますとやっぱり苦労しますね、だから普通の人そういうの嫌なんですよ、だからものすごく造るの上手だし、仕事上手だけれども、俺杜氏にならんとは、そういう億劫の嫌なんですよ。いやわしもねい千代の光来たときほんとに苦労しました。初めは、まあ、一年だけですけどね、それから段々、段々、十年ぐらいた経ちましたらねい、色々のやんでしょ、もうはい今なんかねいそのままで結構、だっけこの前も片桐君も家来てこれどうだって、いやとにかく俺三十年も練り上げてきたんだすけ、そのまま二三年絶対大丈夫だて、そのまま造ってもらっても、その次時代変わって嗜好が変わってくればね、まあこんだ焼酎の臭いの入れとか、純米の、今度三増もなくなんですわ、酒税法でね、だから色々変わってくるけども、いまあお前も二三年このままで大丈夫だて、こないだ、そう言うようなもんでね。やっぱり最初苦労しましたね、もう今忘れてますけどね、そいで税務署なんかその時分、千代の光の杜氏一本ずつ仕込み配合変えてんだら、ああでもねい、こうでもねいってイロハニホヘトチリヌルヲワグぐらいまでいく、仕込みの記号イロハでやんですわ、ハがヨぐらいまでいったんでしょ、だけ昔の出すとき、もうはい、三年保存で五年取ってけて、もうはい、前のやつ燃したんですけどね、だけやっぱりなんですね、そういうの億劫の人嫌なんですよ。」

でも仕込み配合を変えるってことは、毎日出す蒸米の量とか、麴の量とか、そういうの全部違ってきますよね

「はい、だからそれを、今度ね、変えていく。」

レギュラー酒だけならともかく、本醸造だの、純米だの

「はい色々あります。」

そういうのやったら、ものすごく複雑になりますよね

「はい、ですからあの、酒の発酵からねい、発酵見て出来上がる前にちょっと変えたり、出来た酒見てまた変えたり、だから一つも変わっちゃうわけ、出来んの二十日間でしょ、それから今度二年目から、その途中からは、毎日ださんくてもね、ちょこちょこ変えて、そいで次の年、前の年の平均値みんな見ましてね、本醸造はもうちっと麴歩合多くしんとか、レギュラーは水をもうちっと伸ばした方が綺麗とか、次の日変えて、また途中でも変えたりしてね、で三年ぐらいた経つと大体固まってきましたわね、そいで十年ぐらいたの間までは大分変えてましたね、そうすれば段々、段々その蔵に合った、米に合った、気候にあった、量が出てきますから、それからお客の要望と、それから社長の指示と、それみんな合算して、社長『今年こういうのやってくれ』って言っても、社長言いなりになってもあんですわね、お客の方からまた文句来りゃ悪いし、だから社長の『これはこうしてくれとか、もうちっとばかり米を白くしいとか、いやもうちっと水いっぱい入れて薄くしてくれ』とか、色々ありますわねい、そういうのも一応主人ですから聞かには、『お前は経営に従事しているって言うんですよ、杜氏てのはなんも偉くねい、ただ経営に、千代の光酒造の経営にお前従事しているだけだから』と、口の悪い先生言いますからね。『はい成る程そ

うでございます』って、ですから最初は本当に苦労しましたね。」

だから技術的に優れていても、杜氏さんはいやだて方が出てくるわけですね、

「最後に、配合とかね、仕上がりを、杜氏は担当しなきゃなりませんから、あの温度のコントロールとかね、ですから。」

あの税務関係の書類も書くの大変みたいですね、

「はい、最近は楽ですけどね。」

あそうですか、順に前からやっていったあれだど、最後の帳尻が合わなくなるとか、最後の方から前の方に、あはは、

「ていうか、こないだもねい、今度の人さあ、どうだて言うとか、いやそりゃねい合わんから合わした方が良いんだ、だって逆算処理しなきゃしょうもねいも、合いませんとね。」

だから税務署の方もこの範囲なら良いというもの持ってる

「そうそう、有りますからねい、それから税務署なんてあれ固いですからねい、こっちで直していけば、『ああそうか』て言いますけども、途中で『おい直せ』とか、『おりゃ直す』なんて絶対言いませんからね、税務署はだからあんですわねい、そこらあたりはちっときちんとしておっきゃならんですね、そりゃなってこいやねまあ、そんなもんだ。だから欠減が一回あって、あのタンクの具合でそういうのあんですよね。タンクが検定し直しても、今でも千代の光にもねい、90から100ℓ位違うのあんですよ。寸法でね。で、流量計で検定し直したのでも違うのあんですわねい。だっけ流量計の一分間に何回、回ると色々流量計の機械測るのも有りますしねい。はい、て言うか、みんな同じく無いんですわ。そいでその悪いのねい、わしこの前直して、再検定してくれって言っても、機械空いても、酒入ってる場合があんです。だから出来ないのもありますしね、まあ二三本ちょっと狂ってるのもあんです。だから、そういうのはその通りに帳面書かんねいんですわ。で他行くとまた酒出てくるんだわ。たとえばこのタンクに入れといて100ℓ欠になりました、寸法採ったら、ちっと計算しても、で他行くとまた、他のタンク行くとこの減った分がまた出てくる訳、正規のタンク行く平らなタンク行くとそう言うのあんですは、だから出たって帳面直しとって、またこっちいったら付いちゃうわけいかん。全部そこへ、『おまえこぼしたんじゃねいか、盗んだんでねいか』、そういうもんすからね。そういうときこれ直さんかならん、一時、そいてなるだけそういうの使いたくないんですけどね、タンクにいと掴まんかならん、だからそういうのもうはいね、検定し直すんですけどね。したら流量計空いてねいとか、今長野あたりから鑑定来るんですよ、新潟の税務署あたりに有るんですけどねい。やっぱり空いていないと駄目なんですわ。流量計で実測やるんですよ、水いっぱい入れといて、測っていくんですよ。それでも狂ってんのあんですからねい。だから40や50ℓ違うタンクは多いですわ。ひどいの100ℓ位違う。だから、そういうのはねい、なるだけ分かりますからねい、再検定してもらわなくても、今のしゃくであつたり機械空いていないと出来ませんからねい、そういうことあんですわ。」

(4) 蔵生活と農村生活の収斂

イ) 酒屋仲間；母村での蔵人同士の交流

さてそれで、今度は蔵から戻ってきたときの話なんですけれども、お互いに同じ蔵に行っていた人々というのは、こちらの自分の家に戻ってきていた時にも、行き来ていうんですか、相談事したり、話しに行ったりとか、食べに行ったりとか、そう言う日常の交流というのはするものですか？

「はい、あーっと、それありましたねい。**酒屋仲間**いますかね。そいで昔はねい、杜氏さんのところに田の草取りにいった。」

はい、その話良く伺います。

「はい、石田さんの所へ、『**峯村田の草取り**に来てくれ』って。そいで金は貰わんけどねい、終わると、酒一杯飲ましてねい、そういうの随分ありましたねい。ははは。」

農作業の手伝いですね。

「手伝い。」

その他に、例えば、ユイとか日雇いに酒屋仲間を優先的に選ぶっていうこともやってたこと有るんですか？

「そうですね、そりゃ、有りましたね。」

それは、逆に言うと、なるべく気心のあった、仲間とか、親類を蔵に連れて行きたいということが、逆にあったんでしょうか？

「そりゃ、有りますね。はい、まあ、**知り合い**とかねい、それから**血筋**とか、はい、**気心の知れた人**ですね。」

それが、一番人間関係もうまくいく

「うまくいきますね。」

じゃあ、当然のことですが、婚礼とか葬礼の時の義理も出す相手だということですね。

「そうですね、」

ロ) 夏場の技術交流

それから、局の鑑定官とか試験場の技師とかとは、どういう時に接触する機会があるんでしょうか？

「そうですねい、これは前には、**夏の講習会**あたり、静岡行ってるときはねい、いつも指導官や先生方来ますとねい、一緒にねい、あの近所の杜氏連中とねい、一杯やりましたねい。先生方招待して。」

静岡へ行けば静岡の局の鑑定官

「試験場になります。試験場の先生。」

こちらの、新潟の、出稼ぎから戻ってきたときの、新潟の醸造試験場の技師との交流でのも有ったんでしょうか？

「はい、はい。有ります。それは、わしら**試験場の同窓会**てのが有りますから。」

伝習生の同窓会

「はい、前にはねい毎年、嶋先生もそうだ、他の先生方もねい観察に一泊行ったりねい、でしょっちゅう飲んでました。最近はあるまいそういうの無くなっちゃですねい。それは、しょっちゅうやります。一泊ぐらいでね、二三次。」

頸城杜氏で研修会みたいなのもあるんですか？

「それ、今まで、解散する前は、愛知行ったり、吟醸研修会で名前だね。ほんで各蔵で見学、見学なんてそりゃまあ出汁ですけどね。しょっちゅう行って、あのほら、なんかその有名な所の旅館行ったりねい、研修という名前でねい、それ毎年やってました。」

それはいつ頃やるんですか？

「ええと、六月から七月、はい。」

先ほどの伝習生の同窓会はいつ頃やってたんですか？

「それはねい、あれ春と秋始まる前頃ですかにゃ。はい農閑期利用してねい、盆避けて、はい。」

で例えば、静岡の鑑定官と講習会やるのは造りの期間ですか？

「いや、こっちにねい、講習に、よくあの時分、夏期講習会、向こうから来る。試験場でねい各県の先生方を一人ばっかずつ頼むわけ。」

お呼びして

「はい、それで、今日は静岡の何々先生来たって、その管内行ってる連中みんな寄ってさあ、うん、寄ったり、一杯やったり、佐渡へ行ったりねい、昔はねい、八月頃でしたかねい、」

それは、こちらの酒造従業員組合で企画したと、

「はい、頼むわけです、そうすると、そう言うのは、その先生の県へ行ってる連中が、その管内行ってる連中だけが行ってね、で一杯やるわけです。」

そうすると、頸城の酒造従業員組合がやるのは、夏の講習会と吟醸研修会ですか？

「はい、はい、そうですね。」

で、伝習生の同窓会は、醸造試験場の幹事か何か？

「はいそうです。同窓生でね、」

第五節 職業コミュニティとはなにか

職業コミュニティの先行研究については別の機会に論じる予定があるので、ここではそれらを詳細には触れず、G.Salaman (1974) の概念定義を簡単に見てみよう。

G.Salamanによれば、職業コミュニティは、①メンバーたちが自分の職業に基づいて自己イメージを形成し、その職業集団に対して帰属意識を抱き、②職業集団を準拠集団として、その価値・規範、信念、知識

を内面化し、③その職業集団のメンバーたちとその職場を離れても交流し合うために、職業生活とそれ以外の生活が収斂する、という特徴をもっているという。すなわち、職業コミュニティとは、職業的自己イメージと職業文化を共有し、職業外の社会生活で共同する人々の集団だということになる。そして、職業コミュニティが形成される条件としては、その職業のメンバー達が、①労働に没頭していて、②社会的地位で見て上位の集団から境界的に扱われ、③職業的役割が非職業生活を包含するような、職業文化の浸透性、雇用組織の取り込み、職業的制約などが存在することだと論じている。必ずしも地域的近接性を要件としないG.Salamanのモデルにせよ、地域的孤立が共同性の前提であるとするM.I.A.Bulmer (1975) のモデルにせよ、ここでは、これらのモデルを検証するべくデータの分析を行っているのではない。研究上の問としては、職業コミュニティが地域的近接性の根拠なしにどの程度成立しうるのかということデータをデータから知りたということだ。そして、比較を進める中で、既存の職業コミュニティの諸理論を検証するのではなく、新たな理論を浮上させたいと考えているのだ。ただ、手掛かりとして、職業コミュニティを構成する要素とされているものに関するデータを集めるべく項目を選定して、聞き取りを開始した。そして、調査項目から脱線して話者が自由に語ることを求めることで、話者の構成する職業コミュニティの世界を垣間見ようとした。こうして収集されたデータとしての語りに、ナラティブ分析を試み、そこから浮かび上がってくる、彼らの重要な観念をコード化して、後で見る図4のような諸カテゴリーを得た。そこでは、先行する諸研究では想定されて来なかった、縁故採用というリクルートの方式とそれに基づくクリークの形成が杜氏集団の職業コミュニティでは重要であることが明らかになった。また、選択的コーディングによる理論形成を試みると、これらのカテゴリー間の規定関係についても、先行諸研究に見られるような職業コミュニティとその形成の前提要因との間に見られる一方向的規定関係ではなく、後で見るような諸カテゴリーの循環的規定関係が浮かび上がってきた。

さて、これまでの峯村杜氏の語りから読み取れる頸城杜氏の職業コミュニティは、次のような特徴を持っている。

親方は、ほぼ支部（旧町村）の範囲内で自分の配下の蔵人をリクルートする。もちろん親戚関係や以前同じ蔵で働いた知り合いは支部の範囲を超えることがある。そこで、地理的に近くまとまった範囲として、頸城平野とか刈羽平坦地とか越路・長岡・小千谷地域とか、野積海岸などに、支部を基礎としてリクルートによって緩く結びつく酒男ネットワークが形成される。それらは外部から頸城杜氏、刈羽杜氏、三島杜氏、野積杜氏といった呼称で呼ばれたが、酒男たち自身が帰属意識を持つ職業コミュニティの範囲は、あくまでも支部（旧町村）であった。だから、頸城杜氏（頸城郡全体の酒男集団）といっても、実際に酒男たちが帰属意識を持つのはその内部の柿崎杜氏、吉川杜氏、頸城杜氏（旧頸城村の酒男集団）、大潟杜氏、松代杜氏、大島杜氏、浦川原杜氏、安塚杜氏などの旧町村を単位とする酒男の集団である。この集団は、同じ酒屋で蔵人として働く機会が多かった。さらに、杜氏が蔵での人の和を重視して、地縁者、血縁者を蔵人として集めているために、彼らの間には夏場の農作業の共同や行き来（付き合い）も頻繁に見られた。そして、こうした蔵と母村での緊密で頻繁な相互行為が行われる中で、彼らの間には共通の価値・規範、信念、仲間意識、酒造技術が身につけられていった。

ここでは語りの中で話者が構築し、私が読み取った「職業コミュニティ」を軸足コーディングと選択的コーディングの方法で纏める作業を行いたい（図4）。すなわち、峯村氏の語りから、中心カテゴリー（職業コミュニティ）とサブカテゴリー（職業コミュニティを形成する諸要因）を析出し、それらの関係を、話者の解説にそって説明することにする。

それは次のように、述べる事が出来るだろう。

① 蔵での労働編成は、広敷番（ご飯炊き）、働き（雑役）、釜屋（蒸きょう）、二番（道具の清掃）、麴屋（製麴）、もと屋（酒母造り）、頭（作業の統括、測定、検査）、杜氏（作業計画の立案、酒の設計）といった職位に基づく分業が存在するが、実際の作業では、手空きの者が順次物量の流れにそって他の作業を手伝うという協業が行われている。→

そこで、② 蔵の中では和を重視する行動規範が確立される。→

そのために、③ 親方請負制という雇用方式をとる蔵では、和を保ちやすくなるように、杜氏が地縁者、血縁者中心のリクルートを行う。→

図4 職業コミュニティ（中心的カテゴリー）とサブカテゴリーとの関係

太字はインビボコード、中抜きは**中心的カテゴリー**、斜字は**サブカテゴリー**

職業コミュニティ（中心的カテゴリー）

(1) 自己イメージ

- | | | |
|---------|---|---|
| 酒造従業員 | { | 酒男；出稼ぎの蔵人
年間；通年常用の酒造工 |
| 酒屋で働く人々 | { | 蔵人；広敷番、働き（わけいしょ）、釜屋、二番、槽長、麴屋、もと屋、
頭（あに）、杜氏（親方）
分業に基づく協業 （サブカテゴリー1）
店の人；販売係、瓶詰め工、ラベル貼り
酒屋の主人・家族
検査技師；大学出 |

(2) **職業文化**（サブカテゴリー4）

- | | |
|--------|--|
| 価値・規範； | 人は人に揉まれて人になる。 |
| 信念； | 良い酒は水の如く滑らか
カップ取った酒は材料
亀口酒は飲むな
寝坊で泡を溢れさせるな |
| 杜氏の資質； | 若い衆の統率（ 和が先でしょうね ）（サブカテゴリー2）
帳面を億劫がらずに付ける、欠減 |

(3) **蔵生活と農村生活の収斂**（サブカテゴリー5）

- 酒屋仲間；同じ酒屋に出稼ぎに出ている人々は蔵では蔵人と呼ばれ、母村では酒屋仲間と呼ばれる。そして、彼らは母村で農業などに従事している間も様々な生活の共同や行き来がある。**田の草取り**
- 頸城支部では、吟醸講習会、夏の講習会を行い、醸造試験所の伝習生は同窓会を行う。

(4) リクルート

- 知り合い、血筋、気心の知れた人**を選ぶ（サブカテゴリー3）
- クリーク（派閥）の形成**（サブカテゴリー6）

また、④ 蔵での共同労働、共同生活は蔵人特有の職業文化の形成を促す。→

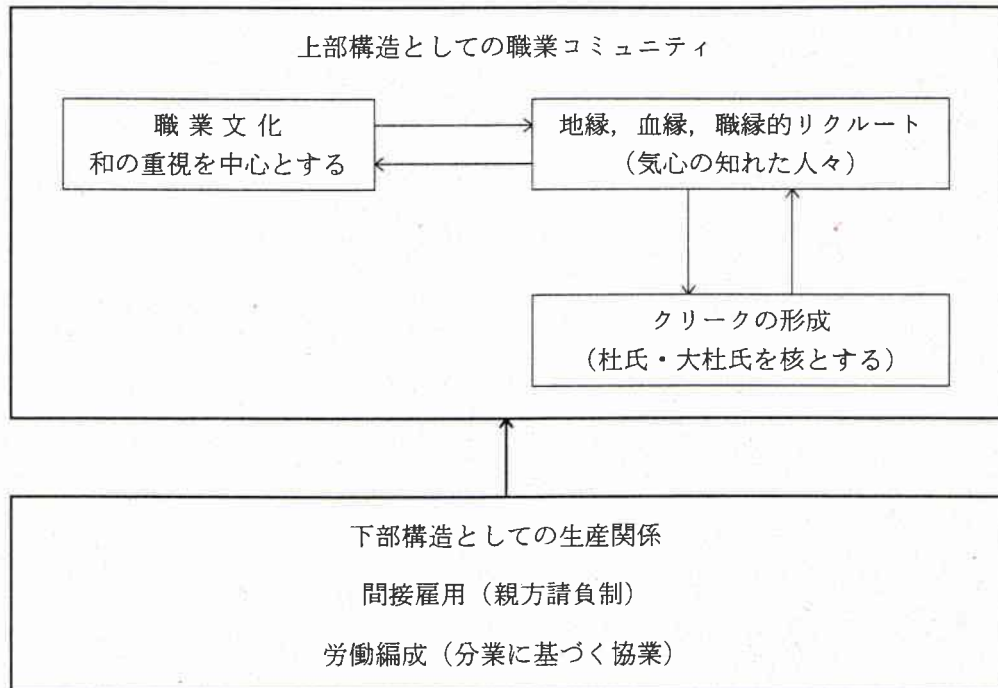
こうして、⑤ 結束を強めた蔵人は母村に帰っても、酒屋仲間として、農作業の共同、冠婚葬祭の亭主役から日常の話相手などの行き来をする。→

そして、⑥ こうしたことで、同じ酒屋・蔵で働いた酒男たちのクリークが形成され、その緩やかな連合体としての杜氏集団、すなわち職業コミュニティが形成される。

これを、中心的カテゴリーと周辺の諸カテゴリーで要約的に表記すれば、以下のような経験的一般化が得られる。

① 分業に基づく協業という蔵内の労働編成→②和という職業的価値→③地縁的・血縁的リクルート→④蔵内の労働と共同生活による職業文化の再生産→⑤母村での酒屋仲間という共同生活→⑥母村でのクリーク

図5 暫定的理論モデル



の形成→⑦クリークの緩やかな結合としての職業コミュニティの形成, いう循環的な出来事の連鎖が存在する。

このモデルでは, リクルートの範囲やクリークの広がり旧町村という比較的に狭い範囲の地理的空間内に収まることから, さきに述べた研究上の問に対する答えは, 「職業コミュニティの形成にも地域的近接は欠かせない」と言うことになるだろう。

今回の分析は, 一人の話者の語りから構成した「職業コミュニティ」のモデルであるから, 他の話者達の語りというデータを追加して, こうした経験的一般化を修正し, 洗練していかなければならない。そして, スタートの現時点でこの経験的一般化から想定される理論を示せば, 図5のようになるだろう。すなわち, 親方請負制という間接雇用方式と分業に基づく協業という労働編成から成る生産関係を下部構造として, 和の重視を中心とする職業文化が形成され, それを維持するために血縁, 地縁, 職縁のある気心の知れた人々のリクルートが行われ, このことが蔵人＝酒屋仲間というクリークを形成し, このクリークがまた血縁, 地縁, 職縁に基づくリクルートを強化するという循環的規定関係が発達する。こうして, ①職業文化の共有と②蔵と母村における社会関係の収斂とを特徴とする職業コミュニティが形成される, ということだ。今後の課題はこの暫定的な理論を分析的帰納の方法論に基づき, データの追加しながら理論的飽和に達するまで修正を続けることだ。

参考文献

- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, Inc. 後藤将之訳「シンボリック相互作用論: パースペクティブと方法」1991, 勁草書房
- Bulmer, M.I.A., 1975, "Sociological Models of the Mining Community," *Sociological Review*, 23:61-92.
- Chaitin, J., 2004, "My Story, my life, my identity", *International Journal of Qualitative Methods*, 3(4):1-17.

- Clarke, A. E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn, *Symbolic Interaction*, 26(4):553-576.
- Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods," *Studies in Symbolic Interaction*, 17:43-72.
- Charmaz, K., 2000, in N. K. Denzin, & Y. S. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, second edition, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顕訳「質的ハンドブック 2 巻: 質的研究の設計と戦略」2006, 北大路書房
- Charmaz, K., 2006, *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- De Beaugrande, R., & W. U. Dressler, 1981, *Introduction to Text Linguistics*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 池上義彦他訳「テキスト言語学入門」1984, 紀伊国屋書店
- Duliba, K. A., & J. Baroudi, 1991 "Is Personnel: Do They Form an Occupational Community?" *ACMDL*, 372748, 24-34.
- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社
- Glaser, B. G., & A. L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company, 後藤, 大出, 水野訳「データ対話型理論の発見」1996, 新曜社
- Glaser, B. G., 1978, *Theoretical sensitivity*. Mill Valley, CA: The Sociology Press.
- Glaser, B. G., 1992, *Basics of grounded theory analysis: Emergence vs forcing*. Mill Valley, CA: Sociology Press.
- Glaser, B. G., 1998, *Doing grounded theory: Issues and discussions*. Mill Valley, CA: Sociology Press.
- Glaser, B. G., 2002, "Conceptualization: On Theory and Theorizing", *International Journal of Qualitative Methods*, 1(2):1-31.
- 原田杏子, 2003, 「人はどのようにして他者の悩みをきくのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発話カテゴリーの生成—」*教育心理学研究*, 51: 54-64.
- , 2004, 「専門的相談はどのようにして遂行されるのか—法律相談を題材にした質的研究—」*教育心理学研究*, 52: 344-355.
- Heath, H., & S. Cowley, 2004, "Developing a grounded theory approach: a comparison of Glaser and Strauss," *International Journal of Nursing Studies*, 41:141-150.
- Huehls, F., 2005, "An Evening of Grounded Theory: Teaching Process through Demonstration and Simulation", *The Qualitative Report*, 10(2):328-338.
- 伊賀光屋, 1986, 「モニター・ジュ・鑑屋」新潟大学教育学部紀要, 28(1):79-97頁。
- , 1997, 「参与観察『蔵』—蔵人の労働と生活」新潟大学教育学部紀要, 36(1):129~147頁。
- , 2000, 「産地の社会学」多賀出版
- , 2003, 「出稼ぎから通勤へ—新潟県越路町の酒造出稼ぎの変化」*日本労働社会学会年報 第14号*, 103~125頁。
- , 2005, 「品質構築のためのフレーミングとディカップリング—『有りがたし』のフレーミングと『よしかわ杜氏の郷』のアクター・ネットワーク—」新潟大学教育人間科学部紀要, 7(2): 181~196頁。
- , 2005, 「外部スターによる工業的品質の構築と経路依存からの脱却—『加藤酒造』融米造り」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(1):49~64頁。
- , 2006, 「職業コミュニティへと取り込まれる過程—杜氏になる—」新潟大学教育人間科学部紀要, 8(2):171-182頁。
- , 2006, 「企業コミュニティに埋め込まれた知識—朝日酒造の酒造技術—」新潟大学教育人間科学部紀要, 9(1):61-85頁。
- 木下康仁, 1999, 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 質的研究の再生」弘文堂

- , 2003, 「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践」弘文堂
- , 2005, 「分野別実践編・アプローチ」弘文堂
- , 2006, 「グラウンデッド・セオリーと理論形成」社会学評論57(1): 58-73.
- Mills, J., A. Bonner, & K. Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" *International Journal of Qualitative Methods*, 5(1): 1-10.
- 水野将樹, 2004, 「青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成—」教育心理学研究, 52: 170-185.
- 戈木クレイグヒル滋子, 2006, 「グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 理論を生み出すまで」新曜社
- Strauss, A. L. & J. Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, 1998, 操, 森岡訳「質的研究の基礎」1999, 医学書院
- , 1994, "Grounded Theory Methodology," in N. K. Denzin, & Y. S. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, Sage Publications.
- 谷口明子, 2005, 「病院内学級における教育実践の特徴—質的研究法による実践の特徴カテゴリーの抽出—」教育心理学研究, 53: 427-438.
- Van Maanen, J. 1988, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, Chicago, The University of Chicago Press.
- 柳田国男, 1980, 「民間伝承論」伝統と現代社